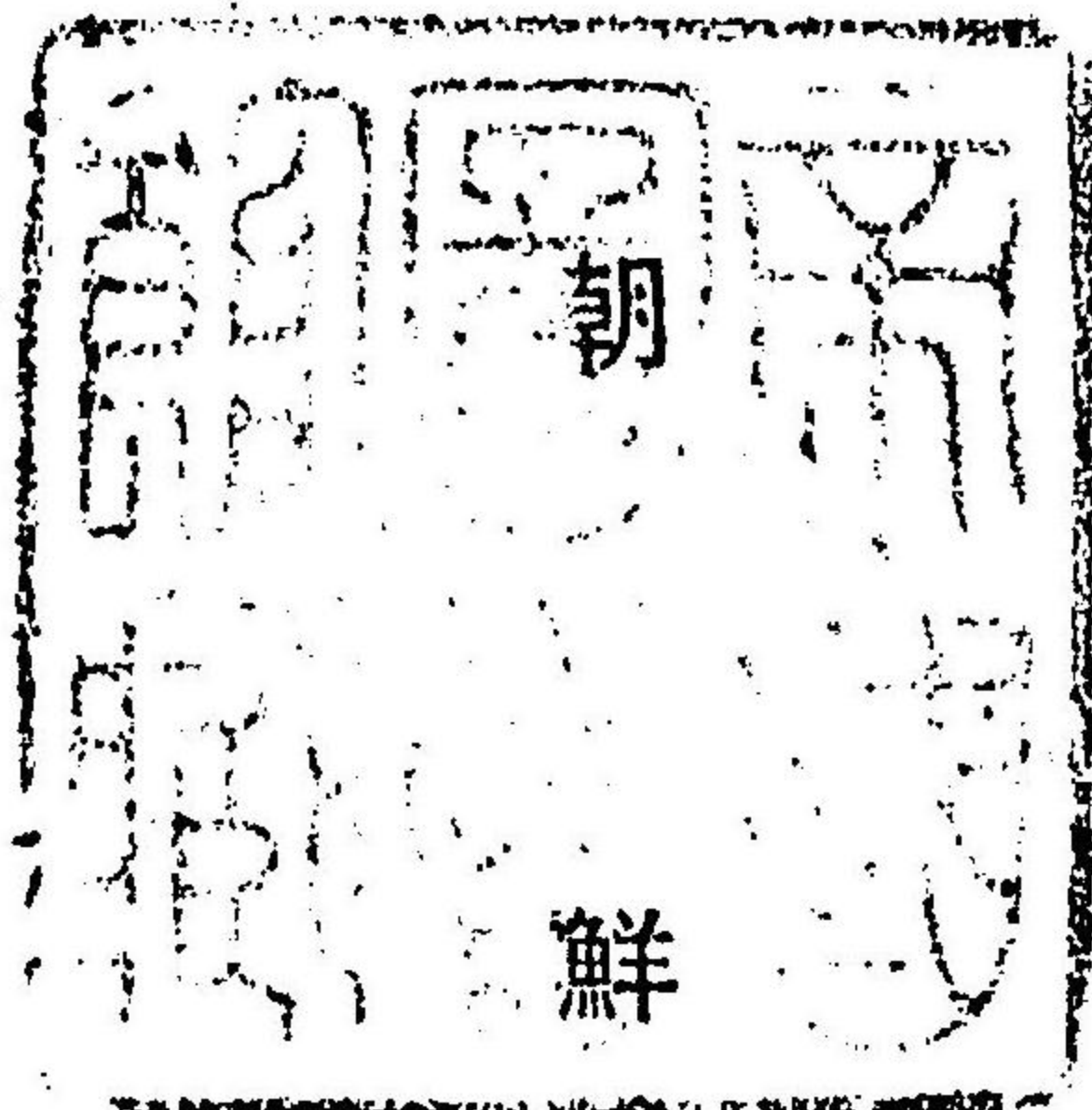


中 C-34

338-68



虛

子



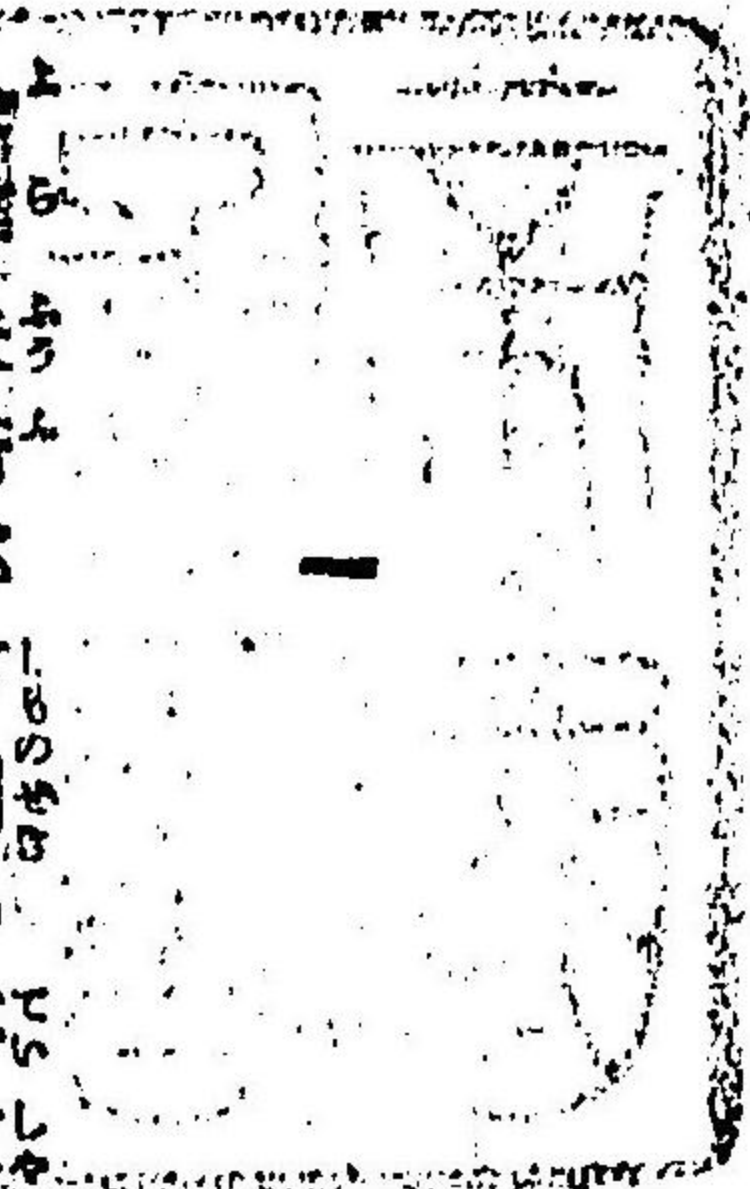
338
68

朝てら

鮮せん

虚

子



余あま等ら夫婦ふうふが下しも關のきの停車場ていしやばに下くだり立たつたのは上じやうげん弦げんの月つきがもの淋しみしく雲くも間まを出でたり遣は入いつたりして生なま暖あたい風かぜの吹ふいてゐる一夜いちやであつた。停車場ていしやばでは一時間いちじかん足たらず出しゅつ船せんを待まち合あはさねばならなかつた。此こゝ停車場ていしやばで誰たれの眼めにも著ちやくしく映えいずるのは壁へき上じやう高たかく大おほきな黒板こくばんが並ならべ掛かけてあつて、其そに何なに丸まるくと船名せんめいが誌しるされて、仁川じんせん

行とか、釜山行とか、大連行とか、又其發着時間等の書かれてある事であつた。これは他の停車場では見る事の出来ぬ事で、愈々これから本土を離れるのだといふ感じを誰の心にも起こさしめるのであつた。流石に妻は淋しさに堪へぬやうな顔をして余に寄り添ひ乍ら、

「この人達は皆釜山に渡るのでせうか。」と其處に雑沓してゐる多くの人を指して聞いた。

「無論さうだらう。この一室は皆關釜連絡船に乗る乗客許りだもの。」

「でも、あの大勢の家族連が飯櫃を紐てからげたのを持つて居つたり、一人旅らしい女が子供を背にくくりつけたりしてゐるのを見ると何だかすぐ御近處にでも行くやうですわね。」

「さうさなあ、けれども其の無造作なやうなところに淋しい慌だしい心持があつて、本土を離れる人といふやうな感じが強いぢや無いか。」

斯んな話をし乍ら二人の目は期せずして、十四五の小娘を連れ、とある老人夫婦の上に着ちた。老人は最前から切符賣下口に立つて何かくどく係員に質問して劍突を食つてゐた。老人は頭の後半にのみ毛があつて其が汚れ延てゐて同く汚れた長い髭を生やしてゐるのが目に立ち、女房は瘡せ衰へて立つてゐるにも堪へ無いやうに蝠蝠傘を突てゐた。唯だ娘のみは仕立下しらしい縞物を着て小ざつぱりとしてゐたが其でも顔は營養不足らしく青ざめてゐた。

「何か判る事なら貴方行つて教へてあげなさいな。」と妻は見

兼ねたやうに言つた。余が立上つて近よつた時老人は漸く賣下口を離れて此方に來た。事件はもう落着いたらしかつたが其汚れた長い髭を動かして乍ら獨りてぶつくと口小言を言つてゐた。ざはくと俄かに室内が動揺しはじめたのは驛員が切符を切り始めたのであつた。彼の老人はハガキを柱に當て、筆を持つやうに鉛筆を以つて目をシヨボシさせ乍ら一字書いては電燈の光に透かせて見てゐた。さうして驛員の切符を切り始めた事は親子三人とも氣が附かぬらしかつたので余は改札口に出て行く序に、

「もしくもう切符を切り始めましたよ。」と知らせて遣つた。老人は乙構さうに振り返つて暫くぼんやりとしてゐたが、やがて俄に氣がついたやうに狼狽へはじめた。さうして余等が改札

口を出た時に彼等三人は行列の中に割込まうとしては他の人々に叱られてゐた。

プラットホームを出ると其處はすぐに棧橋になつてゐて關門海峡の夜景が畫圖の如く目の前に展開され、バサツといふ底力のある音の絶えず耳に響くのは、其處に横附けにされた小蒸汽の腹をうつ波の音であつた。

全體どの船に乗るんでせう。」と妻は心細さうに前方を見渡した。今迄話に許り聞いてゐた海峡は想像してゐたよりも廣く水を隔て、向ふに見ゆる帯のやうな火は門司の町と想像された。

一二等の客許り乗せた小蒸汽は間もなく棧橋を離れて門司の灯近く碇泊してゐる梅が香丸の方に月下の波を破つて進んだ。前の老人親子子供を負つた一人旅の女お鉢を紐て縛つた家族連

等を初めとし多勢の三等客は皆後に取残され此小蒸汽の再び棧橋に歸るのを待つのであつた。六

梅が香丸は一個の灯の城の如くがつしりとした船體に電燈の花を咲かせてゐた。船に弱い余等夫婦は其美くしい船室の中に唯小さくなつて寐る許りであつたが時々眼を覺まして見ると船は大きく揺れて丸い小さい窓に玄海の星が瞬いてゐた。

二

愈船が釜山に着いた時余は妻と共に甲板に出て見て驚いた。棧橋を見下ろすと其處をぞろ／＼と歩いてゐる背の高い白衣の人は皆朝鮮人であつた。

「あれが朝鮮人だよ。」といふと青い顔をした妻は唯「まあ。」と言つて眺めてゐた。

「一人一人皆煙管を啣へてゐるね。」とか皆小相撲のやうな頭をしてゐるやあがる。」とか我等の傍の人は話し合つて笑つてゐた。彼等は背中に木曾の山人が背負つてゐるやうなものを背負つて其に荷物を乗せて運んでゐた。

やがて我等は船を下りて多くの旅客と一緒に海岸通りともいふべき町をぞろ／＼と歩いて停車場の方へ行つた。道傍に物賣つてゐる多くの朝鮮人の中には女もあつた。彼等はをひろげるやうにして蹲踞み前に大きな飯臺を置き、つてゐる多勢の朝鮮人に一々何物かを盛り渡して、ると其は饅餡のやうなものであつた。

家は皆日本風で店にゐる人も皆日本人であつた。日本の内地にゐるのも同じ事であつたが、唯労働者がぞろ／＼と其店先を彷徨てゐるのがいかにも殖民地的な感じがした。

停車場は日本の内地でも稀に見る位の立派な建物であつた。待合室に雑沓してゐる人は下關の待合室で見た顔が多かつた。老人親子も子を背負つた女もゐた。唯飲櫃を縛つた一行だけは見當たらなかつた。

朝鮮人の労働者らしいものは此處にも盛に出這入りして居た。其の多くは子供であつた。或一人の子供の朝鮮人は重い荷物を背負つて這入つて來た。額から流れる汗を彼は其汚れた白い袖

で無造作に拭いて、其荷物を腰掛けの上を下ろした。其處には夫婦連の商賣人らしい日本人が腰を掛けてゐた。男は財布から五錢銅貨を出して與へた。朝鮮人の子供は其ては規定の賃銀に足り無いといふやうな顔付きをして五錢銅貨を載せられた手を突出した儘で引込めやうとしなかつた。商賣人は其手を拂ひ避けるやうにして、

「あつちへ行け／＼。」と言つた。朝鮮人の子供は「足りません。」と日本語で言つた。男は再び手で拂ふ様にして、無い／＼。もう其より無い。」と言つて子供を突のけるやうにした。子供は額から絶えず流れる汗を片方の袖で拭ひ乍ら矢張り突出した方の手を引込めやうとしなかつた。時々横眼を使つて其周圍に居た人の顔色を覗ふやうにしてゐるのは何となく日

本人に對し恐れを抱いてゐるやうにも見えだが、其でも突出した
手の上には一個の白銅を載せた儘で決して引込めやうとほしな
かつた。其時男は墓口を開けて見せてさつき遣つた五錢銅貨の
ほか十錢銀貨も、もう他の白銅も無いといふ事を知らせて又手を
振つた。同胞人の此賤しむべき舉動を余は自分の事のやうに耻
かしく感じた。其時さつきから此容子を笑ひ乍ら見てゐた三十
足らずの垢脱のした女房は、靜かに自分の帯の間から墓口を出し
て、其白い長い指で中を掻き探してゐたが、やがて五錢銅貨を摘み
當て、之を落とすやうに子供の手の上に置いた。子供は初めて
承知して其手を引込めた。余は此の朝鮮人の子供の後影を人込
の中に見送つた。朝鮮の男の子は一寸女の子と區別のつかぬの
が多く頭の髪は長く延ばして之を編んで後ろに垂らしてゐた。

其に顔立も女の如く優しかつた。

妻はと見ると此事には少しも氣が附かぬらしく、すぐ隣に腰掛
けてゐる他の一人の女と何が話をしてゐた。其女は一人旅で大
邸より十何里か田舎に這入つた慶州といふ處に夫を尋ねて行く
のだと話してゐた。余は私かに平生餘り壯健で無い妻が今回の
長途の旅に格別の疲勞を訴へぬのを不思議に思つてゐたが、今
此の一人旅の女の青ざめた顔に男々しい決心の色の浮んでゐる
のを見て女の強さといふやうな事を思つた。

三

余等は珍らしい窓外の景色を眺めてゐるうちに釜山から三四

時間目にもう大邱の停車場に着いた。忽ち妻を取り巻く一團の
人があつた。東髪に結つた五十餘りの婦人は小さい紋のついた
古風な羽織を着てゐた。其は妻の叔母であつた。やや色の褪め
た裾模様のある晴着を着て、一番に妻に言葉を掛けた廿四五の婦
人は妻の従妹であつた。其他多少の似寄りを持つた若い男女の
顔が澤山にあつた。妻の叔父夫婦は日清戦争當時既に釜山に移
住して來てゐたので、余は凡て是等の人に初對面であつた。
妻は此一家族の詳しい話を今迄餘りしなかつた。けれども今
度朝鮮に來ると極つてからぼつ／＼話した。何でも此の叔母と
いふ人はもと兎角の批評のあつた人で、叔父が此の叔母と一緒に
なるといふ事は親類中で異論を稱へた。けれども叔父は聽かな
かつた。さうして叔母は従妹を産んでから間も無く叔父を見棄

て、何處かへ逃亡してしまつた。其れから叔父は後妻をも迎へ
ずに哀れな生活をして従妹を育て、居たところが、其後六七年目
になつて突然朝鮮から長い手紙が來た。其は叔母からであつた。
其中には爲替も這入つてゐた。叔父は親類にも斷はらずに従妹
を抱て朝鮮に行つた。親類と叔父との間には其以來音信が絶え
てしまつて一時は生死すら判らなかつた。其の時分の朝鮮は遠
い隔つた國であつた。叔母が其地に渡つて六七年間何をしてゐ
たか、親類中の疑問であつた。實際此の余等を停車場に迎へた
若い男女の中には従妹の胤變の兄弟が二人あつた。其二人が又
各父を異にしてゐるといふことであつた。けれども其後叔父夫
婦は有福に暮してゐて、澤山の田地などを買つたといふやうな噂
がぼつ／＼聞えはじめ、妻が余の家に來てから五六年目に初めて

其従妹から突然妻に當て、手紙をよこした。其は充分とは行かぬが兎に角ひもじい目はせずには暮してゐると書いてあつた。さうして頻りに國許の親戚などの消息をなつかしがつて尋ねて來た。

妻は年老いた叔父を見て亡くなつた自分の父にそつくりだと言つてなつかしがつた。其叔父といふ人は六十を過ぎてゐたが、いかにも好人物らしく垂れ頬に始終微笑を堪へて酒許り飲んでゐた。さうして妻や従妹が情の迫つた話をしてゐるのを別に感激した容子も無く聞いてゐた。有名な其叔母さんといふ人も余の目には平凡な人に見えた。さうして其多くの子供は皆此の父母に對して優しく親切であつた。父の異つた兄弟だといふやうな容子は少しも見えなかつた。

従妹の亭主だといふ人は下級の官吏らしく今は何處かに出張してゐると言ふとで留守であつた。一家の生活は決して富んでゐるとは見えなかつた。余等夫婦は兎に角此處に二三日滞在するにした。

或日妻は斯んなことを余に言つた。

「お久さんが高麗焼のいゝものを澤山持つてゐるから若しあなたの日那が欲しいとでも仰しやるのなら良人が留守でもかまはんから譲つてあげてもいゝと言つてゐましたよ。」と。お久さんといふのは従妹の名であつた。余は別に陶器に興味を持つてゐるといふわけでも無かつたが兎に角見せて貰ふ事にした。

お久さんは一々箱に這入つた古い陶器を澤山取り出して見せた。さうして之は五十圓之は八十圓など、其値段を言つて聞か

せた。さうして今は迎ても買はうと思つても無いもの許りて大方日清戦争上りに手に入れたものだと言つた。

「これは此前〇〇伯爵に御覽に入れましたら大變御所望だつたさうですけれど、良人は二百圓でも手離し度く無いと申して居ります。」と言つてお久さんは、白い陶器の皿を見せた。さうして其が有名な白高麗であると説明した。其皿は余の眼にも立派なものと思つた。是等が皆お久さんのいふやうな値段のものとする。と今見た丈けても三四千圓のものはあると思はれた。見たところは貧しげな暮してあつたが成程斯ういふものが其財産かと感心した。さうして二十年も前から此地にゐる人がこれ位の利益を収めてゐる事は當然なやうにも考へられた。

「この邊のものなら一つ位も持ちになつてもよろしうございま

す。」とやがてお久さんは四つか五つの壺や皿を並べて余にすゝめるやうにした。

余は勤められる儘に其中の一つが欲しくなつた。

「頂戴するといふわけにも行かないから失禮だが相當の値を拂ひませう。」と言つた。お久さんは、

「宜しいんですけれど……と躊躇してゐたがさうですか却つて御心配だと恐れ入りますから其ては半分だけでも頂戴させうか。普通の相場は五十圓位だといふ事ですけれど、二十圓でも三十圓でも宜しうございます。」

余は財布から三十圓の金を出して、一つの壺を受取つた。流石に立派な陶器の容易く手に入つたといふ事を嬉しく思つた。けれどもどういふものだから余の差し出した三枚の十圓札を嬉しさ

うに手に受た時のお久さんの顔を一目見た時には、余は物に厭はれたやうに悪感を覺えた。染々と厭だと思つた。お久さんの生際は脱け上つてゐた。お久さんの右の眉の上には半分眉に隠れた大きな黒子があつた。さうして込み上げて来る嬉しさを隠すやうな顔は薄氣味悪かつた。——これは餘談だが其後京城に行つて余は自慢半分に友人に此壺を見せた。さうして此は或商賣人の手から三十回掘り出したのだと言つた。ところが友人は其手に取るや否や、何だ斯んなもの。これは君日本から輸入した賤もので、五圓もしやしない。」と嘲るやうに言つた。此時余は彈かれたやうに感じたが、同時に彼の時お久さんの顔を厭だと思つた意味を直ちに自ら解釋することが出来た。

大邸では又古い友人で其片田舎に果樹園を遣つてゐる男を訪ねた。友人は朝鮮家屋に住まつてゐた。朝鮮家屋は如何なる大官の家でも棟の低い憐な建物であつて、其中に衣冠束帯の朝鮮人が立つてゐるのを見ると、余はいつでも幼い子供の書く畫を思ひ出した。子供はよく小さい家を書いて其中に大な人物を書いた。朝鮮家屋の中に友人を見出した時も同じやうな心持がした。友人は眞黒な顔をし、細君の顔も日に焼けてゐた。果樹園は川に添うてゐて其處には林檎や苺が植ゑられてあつた。友人は三四年前此地に移住して來た。林檎の木は今年になつて初めて力ある花を着けた。苺は毎朝葉隠れに眞赤な球を連ねた。友人は余を果樹園に導いた。さうして傍の石に腰を掛け乍ら色々の話をした。此處に果樹園を開いてから間もない事であつ



た。何處からとも無く一匹の放れ牛が園内に飛び込んて来て折角植付けた許りの果樹を踐荒しはじめた。主人は鐵砲に丸を籠て其牛を打殺した。主人は私かに韓人の亂暴を覺悟してゐたが併し韓人は少し許り牛の代償として遣つた金に満足したらしかつた。さうして其後或日の事其韓人が突然遣つて来て主人の袖を引張つて放さなかつた。主人は腹を立て、其韓人を打つた。韓人は驚いて逃げ歸つたが、やがて今度は澤山の御馳走を皿に入れて持つて來た。前に頻りに袖を引張つたのは盆の祭に招待に來たものであつた事が初めて解つた。と斯んな事を話して主人は笑つた。

見渡したところの山々は皆禿てゐた。けふは西大門に市が立つといふので、白い朝鮮服を着た男も女も向ふの田舎道をぞろぞろと絶間なく通つてゐた。男は悉く背にものを負ひ女は悉く頭の上に戴せてゐた。廣々とした樹木の無い野中に此行列は長く見渡された。主人は、

「此市は月に一度立つので昔から有名なものだ。」と言つた。

此の友人の家で余は一人の若い男に逢つた。主人の話すところによると、何でも主人の遠縁のもので實際的に劇を研究すると

いふ主張のもとに、壯士役者の群に投じ已にもう二年餘り地方を放浪したのが、此頃此地に渡つて来て、芳美園とかいふ一座に加はり、今は此大邸で打つてゐるのだといふ事であつた。

「矢張り舞臺にも出になるのですか。」と余は聞いて見た。

「私は作者になる積りですから、舞臺には止むを得ない時の外は出ません。」と其男は答へた。

「其なら東京にも出になる方が便宜ではありませんか。」

「ゆく／＼は出る積りですが、まだなかなか其處迄参りません。」

主人が余を何某といふ文學者だと紹介した時、其男はさつと顔を赤らめて驚きの目を瞪つた。さうして、

「私は先生のお作を殊に愛讀して居ります。」と言つた。其から東京の新聞雑誌等に散見される文學上の問題につさいいろいろの

話を持出した。其男はさういふものをも一々精讀して居るものと見えた。よく話して見ると、其も其筈で、此男は行李に一杯の新聞切抜を持つてゐると言つた。さうして旅から旅へ渡る時の彼の大事の荷物は、其行李一つだと言つた。其から又放浪生活の興味といふやうなものをも説いた。

「僕は際涯無き果の果迄人生を放浪して行くのだと思ふと、悲痛に堪へぬやうな心持がします。ゴルキイの描いた人生の如く深刻では無いにしても、其處に又他の境遇の人では想像の出来ぬ生活があります。其處の快味——其悲痛な快味は失禮乍ら先生のやうな順境にあられる方にはお判りが無からうと考へます。」

だん／＼話を聞いて行つて見ると、初め此男は余の作物の愛讀

者であると言つたが實はあらゆるものの愛讀者であるらしかつた。言換れば東京にあるあらゆる文學の嘆美者であるらしかつた。彼は天下を横行してゐるに拘らず東京といふ一聲の前には小さくなつた。さうして彼よりも學力の劣つた經驗の乏しい青年の文章でも其が彼の尊重してゐる東京の新聞雜誌の上に活字となつて現はれたものである以上は少なからざる敬意を拂つてゐるらしかつた。余は東京に在つて地方から出て來た文學志望の青年に度々出逢つた。其等の青年は東京に出さへすれば成功するものと心得てゐるのであつたが其に反して此男は唯東京を恐れて遠くの方に眺めてゐた。

友人はビールを抜いた。三人は茶碗で飲んだ。男は酔が廻るに従つて、

「僕等の生活は悲惨です。」といふ事を繰返して言つた。併し私は必ず東京に行きます。今少し修養してから出掛けます。」と昂然として言つた。

「君はこれから北へ」と行つて、鴨綠江を渡つて、ハルビンを経て世界を一周してから東京へ行くがよからう。」と言つて主人は笑つた。男は笑はなかつた。

余は此男には最早大邸では出逢はなかつた。けれども後になつて京城でも平壤でも出逢つた。此男の名前は鶴見慶之助と言つた。

二日目の夜半大邸の府内に火事があつた。余は寢床の中に在つた儘で出て見なかつた。唯小さい家が二三軒ボオツと燃え

て其儘消えたものゝ如く想像された。此想像の火がいかにも衰
れに淋しがつた。 六二

二三日滞在してゐるうちに叔父の家の事情も荒方わかつた。
一時他に率先して釜山で陶器商を営んだ頃は多少有福に暮した
こともあるらしい。其頃釜山に於ける陶器商は三四軒ほか無つ
たと言つた。けれども内地での失敗者が殖民地に渡つて来て成
功するのはまだ内地人の多く渡つて来ない間の事である。一旦
内地の有力者が踵を接して来やうになると彼等は往々にして又
劣敗者となるのである。言は彼等は殖民地開拓の先驅に使う
に過ぎぬのである。察する所叔父の一家も此例に洩れぬらしい。
彼は遂に生活程度の方外に向上する釜山に住ひ兼ねて其店は他

のものに譲つて近く此大邸に移住したのであつた。けれども内
地人大移住の流れは今日此の大邸にも推し寄せて来てゐる。釜
山を見棄て、大邸に移つた一家はやがて又遠からず北の方へ移
つて行くべき運命を持てゐるかの如く考へられた。

叔母は動物が其子を熱愛するやうに子供達を愛してゐた。子
供達は家を爲したのも、獨立し兼ねてゐるものも皆一所に集ま
つてゐた。例へばお久さんの胤異のすぐの妹は大分年の違つ
た雜貨商を亭主にしてすぐ隣の家に住ひ、一番下の男の子は一町
と離れぬ或商店の小僧に住み込んでゐた。釜山から大邸に移
る時には其一族をあげて移住したのであつた。

叔父夫婦は今は何もしてゐなかつた。其程多くの貯蓄もある
わけが無いが唯多勢の子供がどうかかかうか貢いでくれるので今
七二

は樂隠居だと叔母は言つた。出張勝の腰辨の亭主を持つたお久さんは例の高麗焼を戸棚の中に積み重ねて叔父の家に同居してゐた。

四日目の朝余等夫婦は叔父の家を辭する事にした。其前夜一族のものが集まつて酒を飲んだ。お久さんとお久さんの妹とが琴を合はせた。琴は生田流のけばけばしい飾の着いたものであつた。妻も遂に勧められる儘に弾いた。余も妻の琴を聞くのは久しぶりであつた。

妻の琴は殖民地の姉妹をして感嘆せしめた。此地に在る師匠は固よりの事釜山に在る師匠よりも立派だと言つた。其から生田流で斯う弾くところは山田流であゝ弾くのだなど、姉妹で話し合つたり妻の滞在してゐる間是非教へて貰ひ度いなど、言つ

たりした。今一度姉妹のを聞き度いと勧めたけれども二人はもう弾かなかつた。初め弾いた時の得意さは何處かへ消えてしまつた。

やがてお久さんの弟は、「アラ、ン／＼と妙な悲哀な聲を出して朝鮮の歌の真似をした。月夜などに此歌を聞くと亡國の音がすると云つた。其から又妓生の踊の真似だと云つて砂な手つきをした。

叔母は此時突然余の方を向いて、「貴方京城へ行って餘り無駄なお金をお遣ひなさるな。」と言つた。其年とつた顔は酒の爲に赤く燃えてゐた。さうして極めて肉感的に見えた。

其からお久さんの弟と妹婿の年とつた雜貨商との間に大邸の

妓生に就ての話が始まつた。一人は何とかいふ兩班の妾になつたのは美人であつたと言つた。他の一人は其よりも何とかいふ名の妓生の方が美人だと言つた。二人は同じ事を繰返して主張した。

〇三

斯る一家を取り巻いて更けて行く大邱の夜は淋しかつた。チゲ(朝鮮人の労働者は其淋しい町をうるくしてゐた。此チゲは斯の如く一日町をうるくしてゐて人に傭はれる事を待つてゐるので若し一日傭うてくれるものが無い時は何も食はずに其日は大地の上に寝るのであつた。大鼓の音が聞こえるのは何處かと聞いたら誰か「芳美團一座の芝居だ」と答へた。

四

淋しいやうな賑やかな叔父の家を出て再び汽車に乗つた余等夫婦は互に暫くの間無言を續けた。窓の外に去來する山川は木の無い山や堤の無い川であつた。——山は伐られた儘に打棄てられ、川の水は出る度に氾濫して位置を換へた。——さうして時々菌が重り生えたやうな朝鮮家屋の貧しげな部落があつた。其朝鮮家屋の中には、白い髯を垂らした老人が長い煙管で煙草を飲みつゝ、茫然と外面を見て居た。

余は内地でまだ見る事の出来ぬ廣軌式の大きな汽車が——これも殖民地的とでもいふのであらうか、全く實用一方な殆ど裝飾の無い例へば前立も鐵も無い唯長大な鐵の甲でも見るやうな感



じのする汽車が——大きな動搖を爲しつゝ北へくと進みつゝある事を面白く思つた。さうして迅速に大膽に此鐵路を拓いた戦争前後の日本人の力を思つた。

今汽車は山間の一小驛に止まつてゐた。其處は洵に淋しい山間の小驛であつて柵の外には白衣の朝鮮人が二三人突立つて如何にも無事に苦む人の如くぼんやりと汽車を見てゐた。其邊の畑の中には例の菌のやうな家が散在し其等の家は大方小石を積重ねた一二尺の高さの垣にとり圍まれてゐた。其中に驛に近く瓦葺きの日本家屋が二三軒あつて其一軒の前には子供を負つた日本の女が日本服を着て細帯をしめて丸髷に結つて下駄を穿いて立つてゐた。更に見て居ると驛員に切符を切つて貰つて汽車に乗り込む人々の中に日本人の小學生徒が三四人も居つて皆制

帽を冠り鞆を肩に掛けまごごとしてゐる朝鮮人の間を突き抜け汽車に走り乗つた。其中には色は褪めてゐたが緞茶色の袴を穿いた女の兒も交つてゐた。彼等は汽車に這入つてからも其手に持つてゐる辨當で打ち合ひをしては汽車の中を走り廻つてゐた。

余は内地に在る間は我國民といふものを一民族として世界の多くの人間から切り放して考へ

るべく餘り其機會を持たなかつた。従つて海外の發展といふ事に就ても深い考慮を費した事も無く陸海軍人の赫々たる功名に就ても世の多くの人の如くに酔はされなかつた。其が足一度海峽を渡つて朝鮮の土地を踏んでからは全く矛盾した二個の考が絶えず起つた。其一は此衰亡の國民を憫む心であつて路傍の石に腰掛けて煙管をくはへてゐるソクラテスのやうな老人は何故に他國人に征服されねばならぬかと憫に思つた。其二は斯く一方に被征服者を憫み乍らも同時に此の發展力の偉大なる國民を嘆美する心持ちで流石に日本人は偉い。と初めて此爲す有る民族の上に自己も其民族の一員としての抑へ難き誇を感じるのであつた。斯くして此の山間の小驛に於ける細帯の婦人も醜い顔の小學兒童も此時余が眼には唯頼母しい我國民として映つた。

五

京城の南大門に着いたのは夜であつた。永登浦に停車した時淋しい停車場許りを通過して來た余にはこゝが京城ではあるまいかと怪まれた程電燈の光が美しく眼に映つたが、南大門に着いて見ると流石に殖民地の首府と首肯さるゝ程の電燈の敷が、さき渡り其に送迎の人も新橋以上かと疑はるゝ程の多数なのが旅客の心を浮き立たしめた。

「やあ來たね。」と余が列車を降りた時行きなり聲を掛けた一人の男は友人の石橋剛三であつた。

「君からも一度は來て見ろといふ勧誘を受けたし、星野も」

めてよこしたので頭思い立つて遣つて来た。態々出迎へは
れ入つたね。」と余は心から嬉敷思つた。

「星野も来て居たが他にも一人迎へる客があるとか言つてゐた
から其方に行つたかな。」と言つて剛三はステッキを突いた儘其
大木のやうな體を人込の中に突立たせてゐた。余の後ろにゐた
妻が漸く顔を出して挨拶すると、

「やあよくお出てになりましたね。」と剛三は微笑した。間も無
く星野と他に一人の婦人とか我等の前に現はれた。

「よく来たね。来るといふ事が判つてから大に待つてゐた。奥
さん、よく御出でになりました。たいして御波れはありませんか。
と星野は言つて

「それから奥さん、此方の奥さんは金夫人です。」と星野は妻に其

傍の婦人を紹介した。

「お忘れになりましたてせう、平井の房でございます。」と言ひ乍
ら其婦人は妻の手を握つた。暫く無言であつた妻は、

「まあお房さんでゐらつしやいましたか。」と握手に馴れぬ手を
堅く握られた儘唯驚きの眼を瞞つて其婦人の顔を見つゝ「本當に
暫くぶりてございましたのね。」お手紙は戴いて居り乍らもう
二十年もお目にかゝりませんでしたらうからね。」

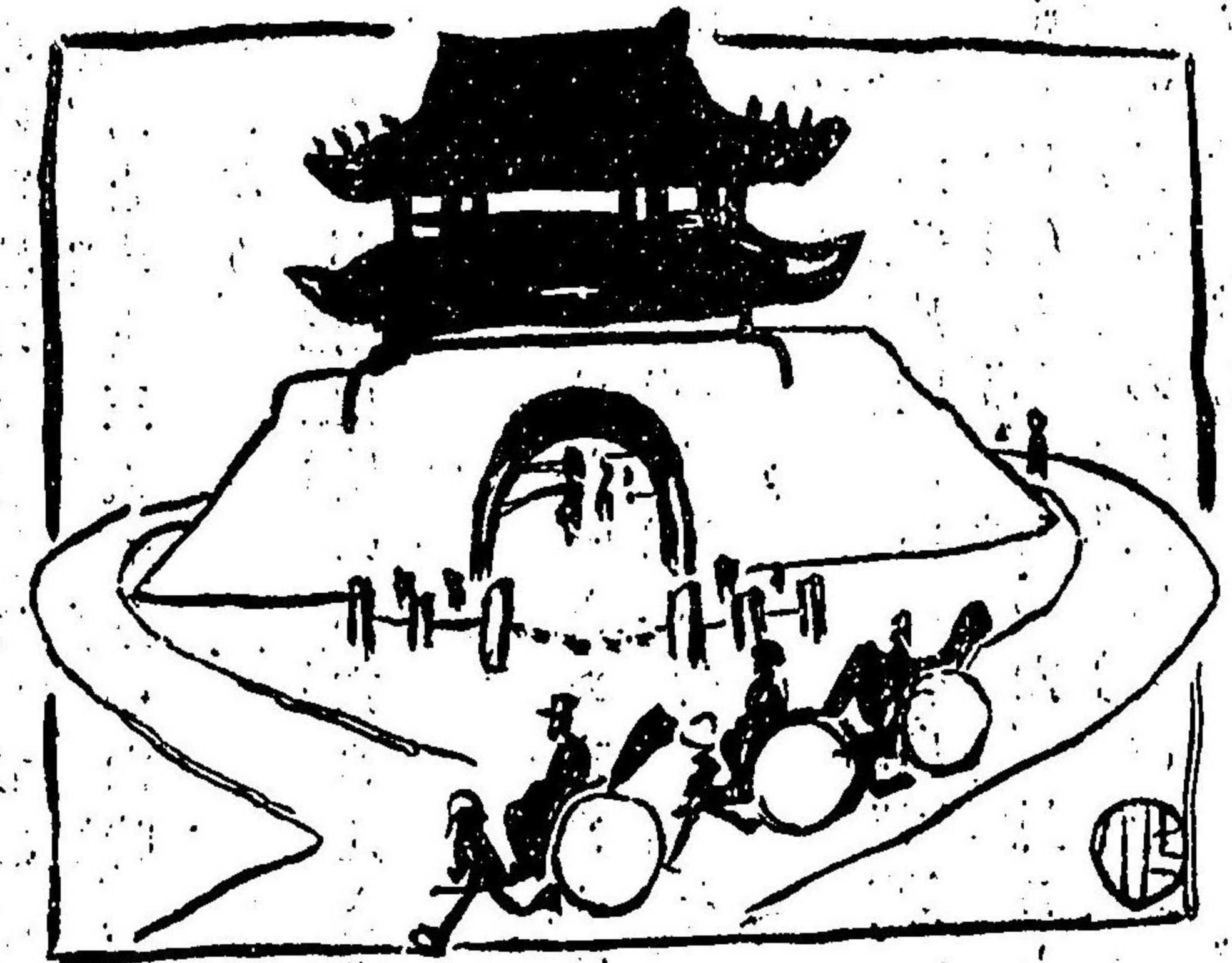
「本統にねえ、十四五の年にお別れした限なんですもの。」と婦人
は一寸言葉を切つて、此間そちらに行くといふお手紙を戴いた時
まあどんなに嬉しかつたでせう。今日か〜と毎日待ち難して
居りましたわ。」と二人は斯んな話を繰り返してゐた。

此お房さんといふのは妻が幼馴染であつたのだが、其後ち別れ

くになつて暫く音信を絶つてゐるうちに朝鮮人の妻となつて此地にゐることが判りふとした事から又手紙の遣り取りをするやうになり今度來ると極つてからも妻はお房さんに逢ふことを一つの樂みとしてゐたのであつた。其朝鮮人といふのは從五位勳四等の金成龍といふ人であつた。

余等は剛三の宿の南山樓といふのに星野に案内されて行くこととなつた。——剛三は外に廻る用事があつて停車場で別れた。——余等夫婦と星野とが朝鮮人の車に乗つて大きな行李や鞆を股の間に挟みつゝある時に手車らしいゴム輪の車に乗つて我等の前を過ぎり乍ら、

「いづれ明朝」と軽く聲を掛けて頭を下げたのは金夫人のお房さんであつた。お房さんは自分の家は廣いから不自由さへかま



はなければ是非來ぬかと勸めてくれなければ余は辭退して兎も角一應南山樓に行く事に極めたのであつた。妻は田舎者が都會の人を見送るやうに茫然と其あとを見送つた。七、悔いも遅れ!!!

朝鮮人の車はガラガラと音を立て、繁華な狭い町を滅茶苦茶に駆けつた。若し星野が先導をしてくれてゐるので無ければ余等は何處に伴れられるのか判らなかつた。唯だ何物にか酔ふたやうな心持で不愉快な朝鮮人の

車の動搖のみを氣にしてゐた。さうして南山樓の二階の一間に星野と妻と三人で坐つた時其處に出て來た女中を捕へて星野はいきなり、

〇四

「これが南山樓のお京さんと言つて浪人仲間には有名な女なんだ。」と言つた。

「仰しやいませ。」とお京さんは星野を叱るやうに言つて女客に馴れぬ眼を一寸光らせて妻を見た。お京さんの出て行つたあとで星野は、

「懺か此座敷だ、あの莞島事件の陰謀がたくらまれたのは。」と座敷を見廻し乍ら言つた。見ると楣間に掲げられた額は筆者の分らぬ書で床の掛地は古びた馬の繪であつた。其額の書も古びた馬の繪も陰謀のたくらまれた座敷といふのによく調和して見え

た。其から星野は又た、

「それ、すぐ其處に見える山が南山だ。」と夜の空に黒く峙つてゐる山を指して、

「あの頂上に寺があつて巫女がある。そやつが君日本人に隠れて夜燈火で王宮に種々の通信をしたといふやうな話もある。さうさ山麓が所謂倭城臺で日本公使館のあつたところさ。」と斯んな話もした。さうして一別以來の染々とした話は其後盃を取りかはしながら夜の更ける迄した。

其夜星野が歸つてから妻は旅中の重かつた丸髻を崩して櫛巻にすべく鏡に向ふのであつた。余は其後ろ影を見乍ら酔ふた頭を枕に横たへ、さつき友人の話した莞島事件や南山の頂の尼寺か

一四

ら燈火によつて王宮に秘密の通信をするといふロマンチックな話を思ひ出した。妻は無造作に鏡を持つて二つか三つの元結を切ると、もうがくりと鬚は崩れて鬚形は妻の手に、髪は左右の肩に垂れた。妻の髪は多くて長く癖の少ないよい毛だといふ事を余は嘗て屢々聞いたことがあるやうに思ふが、今左右に垂れた其髪を見るのに、其は哀れにも短かゝつた。余は一度去れば又來らぬ人生の春を思ふた。

「あい、己が梳いてやらう。」と余は言つた。

「え、どうかお頼み申します。」と妻は笑ひ乍ら戯談のやうに答へた。

余は立上つて妻の後ろに立ち、其の手から梳櫛を受取つた。妻は驚いて鏡裏の影を見乍ら余の爲すが儘に任してゐた。短い髪

でも持ち馴れぬ櫛は自由に動かかなかつた。

「さう引張られては痛いわ。」と妻は髪を根を抑へた。

「己が梳くと又昔のやうに長くなるよ。」

「でも痛いわ。さうコツン／＼頭に當てられちや尙いたいわ。」

「さうか、これなら痛くないだらう。」

「え、でももう澤山ですわ。」と妻は手を出して櫛を受取らうとした。余は其を渡すまいと争つた。鏡は此の半老者の痴態を映して静まり返つてゐた。

六

翌朝金夫人即ち平井のお房さんから電話が掛つて早速伺うべ

きのだが止むを得ぬ差支があるから午後伺うと言つて来た。

南山は夢から覺めたやうな姿をしてすぐ窓の前に聳えてゐた。妻の櫛卷の頭も憐れに淋しかつた。

困つてしまふわ。髪結が来なくつて。」と妻は眉をひそめた。

今朝早く来るやうにと頼んで置いたのが朝飯を済ませてまだ来ないのである。お京さんの話によると流石に此植民地の宿に

女客はまだ少ないさうである。其等の不便は止むを得ない事であらう。結局妻は近處の髪結のところへ案内された。

余は剛三の部屋へ行つた。階子段を下りて又上つたところの八疊と六疊の二室を占領して其邊に行季や鞆は口を開けたまゝ

取散らされてゐた。余は石橋一人だと思つて這入つて見ると、う已に二三人の客があつて一面の碁盤を中に置いて石橋と今一

人の客とが對局してゐた。

「昨晚は。」と聲を掛けると、

「草臥れたらう」と一寸石を持つた手を其儘休めて余の方を見、

「坐りたまへ。」と言つた許りて、又盤面の方を向いて石を置いた。二三人の客はいづれも石橋によく似たやうな風采の男で余の這

入つて行つたのを見たものもあつたが頭から見やうともしないものもあつた。殊に其中の一人は腹這ひになつて頬杖を突いて

眼鏡越しに盤面を見乍ら盛に助言をしてゐた。

「そりやいかん。そりやあ此方から押へなさいいかん。」と矢張り腹這つた儘で延上るやうにして剛三の下ろした石を摘んで置直した。余は暫く茫然と突立つた儘で此一座の光景を眺めたがせう事なしに其處に座つて矢張り盤面を見た。

「助言もいゝが石を置き直すに至つては激烈だ。退韓命令に値する。ハツハツハ。」と豪傑笑ひをして初めて余の顔を見た一人の客は暫くの間ぢろくくと人の造作を吟味した末一言の挨拶も無しに又盤の方を向いた。

「今度は唯朝鮮の見物かい。」と剛三は再び石を下ろしながら言つた。

「まあさう言つたやうな譯さ。」

「そりやアい。君のやうな文學者ももうそろそろ来るがい。」

「君はもう大分久しく居るやうだね。」

「生意氣な事をしやあがる。」と其から暫く碁の方に氣を取られて

ゐて剛三は遂に此の間に答へなかつた。

二人の石を下ろす速度は早かつた。さうして瞬く間に盤面が

打ちつぶされた。一局が終れば余と對談するのであらうと待つてゐたのに其次も亦剛三が石を握つた。けれども流石に石を下ろす前に二三言話した。

「奥様は草臥れはしなかつたか。」

「有難う。一寸今髮結に行つた。」

「今晚は己が案内してやらう。晩飯は他と約束せぬやうにして

置け。奥さんは朝鮮料理は食へまいね。」

余が答を躊躇してゐるうちに剛三は一人て斷定してしまつて、

「泉家がいゝだらう。此頃は彼處も大分繁昌するやうになつた

から、いゝ座敷を取つて置かさう。おい。」と言つて今丁度障子を

開けて這入つて來た一人の女中とも見えぬ藝者らしい女に向い

て、

「泉家に離れの座敷を開けて置く様に電話を掛けとけ。人数？。四五人と言つて置くさ。」
其時もう石をカチンと盤上ばんじやうに下ろして、
「今度は少し手答へのあるやうな碁碁を打て。」

七

午後訪ねて来た金夫人のお房さんは、
「私斯んなに嬉しい事はありませんわ。」と心から嬉しさうにして妻と昔話に耽つた。妻は、
「どうしても田舎だわ。」と髪を結つて歸つた時鏡に向つて不平を言つてゐたが、余は何は扱扱て置きあのべそツとしてゐた櫛くし巻まきが

あんなに房々とした髪や鬘かたむすを形成り得るのを不思議に思ひ、お房さんの何處となく朝鮮化してゐるやうに考へらるゝ扁平へんぺいな額ひたいとを見比べつゝ二人の話を聞いてゐた。二人は、
「まあさうなのですか。」

「本當に夢見たやうですのね。」など、昔の遊び友達ともだちの消息を我を忘れて語り合つてゐた。お房さんの少し體をゆるがしてあまへるやうに言ふ態度は自ら人を牽附けんぷるやうに出来てゐた。
其うち昔語りは少し下火になつて會話くわいわは朝鮮の現代に移つた。お房さんは宿屋住居は女に取つては不便などが多いものであるからどうか姉妹の家と思つて自分の家へ泊ることにしては呉れまいかといふやうな事を言葉巧みに言つて其から斯んな事をも言つた。

「此地では婦人會といふやうなものも出来はしましたが内地の
に比べたらお話にも何にもならんさうでございます。それでも
朝鮮人の奥さん方のうちにもよくものゝ別つた方もありますし、
主な貴婦人方にも御紹介致す積でございますの。」

「いやですよお房さん私のやうなものが。」と妻は顔色を變へて
慌て、其を遮つた。

妻が慌てたのも無理は無い。彼が余の家に来てから交際社會
といふやうなものに出たことが唯の一度でもあつたらうか。彼
は女學雜誌の口繪などで所謂交際社會の貴婦人といふやうな
のを見た事はあるであらうが、其等の人は住む世界が違つて
るものゝやうに思つて居る。其も其筈で彼の夫すら世の中の隅
つこに小さい巢を作つて文學者といふ臍氣な看板を僅にぶら下

げてゐるのに過ぎ無いのである。けれども余は傍から口を出し
て、

「そんな機會はまたと無いかも知れぬから少しお伴をさせて貰
つたらいいだらう。」と勧めた。

「ですけれど私のやうなものが。」と妻は尙躊躇つた。

「あらいやですよ。あなたを御紹介して廻ることが私の誇ぢや
ありませんか。」とお房さんは例のあまへるやうな態度をした。

それから二人の間には又昔話ばかり返へされ日暮近くなつて
からお房さんは漸く歸つた。

其夜泉家の會合は譯も無く腹の皮をよつて笑つた。客が男女取り交せて五人のところ、藝者が四人に拵間が一人來て唯賑やかに騒ぎ立てた。

「一つやらさして貰ひまひよかいな。」と三福といふ大阪辯の拵間は極めて素人臭い手品をした。手品が素人臭いばかりで無く、一體のとりなしが素人離れがしなかつた。其が却つてをかしいので皆がこらへずに笑つた。四人の藝者はいろいろのスタイルの顔を集めた許りで無く、言葉も藝もいろいろであつた。中に純粹の江戸ッ兒らしいのがあるかと思ふと、廣島辯のもあり、大阪言葉の交つてゐるのもあつた。

「貴様等はいろんな方面から流れ込んで來てゐるのだらう。」と冷かすやうにいふと、

「懾り乍ら皆京城ッ子よ。」と今迄廣島辯であつたのが答へた。其うち其處の襖を一枚外づして、其向ふに三福と一人の藝者とが隠くれ、

出たり、ひつこんだり。そりや出た、ひつこんだ。」と一人の藝者が、チャラン／＼と單調な三味線をひくと、三福と藝者とは其襖の隠から顔を出したり引込めたりした。其がをかしいので皆ほろほろと涙をこぼして笑つた。唯其中に我等三人ほど笑はなかつたのは、一人の朝鮮人と彼の藝者とも何ともつかぬ石橋剛三の部屋で見た一人の女とであつた。

朝鮮人は一見内地人と餘り變らなかつた。稍色の褪めたフロック、コートを着て膝を組んで、其膝の先に兩方の手を載せて唯時々ニヤ／＼と笑つた。彼の眼は絶えず注意深く輝いて人の顔を

注視した。さつき剛三は此人を余に紹介して、

「洪元善君は常年の志士さ。見玉へあの齒は拷問の爲めにすつかり抜き取られてしまつたのだ。」と言つた。洵に齒はすつかり入齒であつて其の稍萎びたやうな口許には普通の人に見る事の出来ぬ傷ましい影が漂ふてゐた。

「ねえ洪さん。その頃の事を考へると隔世の感があるだらう。」洪さんは其傷ましい口許をすこし緩めて微笑しつゝ、

「さうでございませうとも。夢のやうでございませう。貴方にお眼にかゝつた時分からでも大變な違ひでございませうからねえ。」と極めて流暢な日本語で答へた。余の妻の如きは驚きの目を瞠て洪さんの口許を見てゐたが、其口からかゝる流暢な日本語が出るのを見て更に驚きを重ねた様であつた。其うち金夫人の話が持

上つた時洪さんは、

「奥さんと金成龍の奥さんとお友達でゐらつしやるのですか。金成龍の奥さんはえらい方でございます。子供は皆日本風に育て、家庭でも主に日本語の方を使つてゐます。」と言つた。どうして金成龍と結婚したのかを尋ねて見たら、

「金成龍は久しく日本に行つて居りました。閔妃事件の後でございませう。其頃奥さんに貰つたのでございます。」と洪さんは事もなげに答へた。

「日本人で朝鮮人の奥さんになつてゐる人は澤山ありますか。」と聞くと、

「澤山ございます。」と洪さんは又事もなげに答へた。洪さんは誰からても盃を受けると、

「さうてございますか。」と居住居を直して盃を受けた。けれども酒は多くは飲まず彼のいたましい口許を引締め注意深い眼を輝かして餘り人程に笑はなかつた。

今一人余等程笑はなかつた女といふのは座中の藝者から姉さんくと言はれてゐたが三味線をひくても歌うても無かつた。唯藝者同様石橋初め余等にもお酌をした。座中のどの藝者よりも遙に美人であつて美くしい江戸の詞を使つた。唯騒ぎ暮らし笑ひ轉げた植民地の一夜に洪さんと此女とは何となく心を引締めるやうな違つた印象を與へた。

泉屋の會合に笑ひ草臥れて歸つた夜は何も知らず熟睡した。唯夜中にハラ／＼と裏の板屋を叩く雨の音がふと耳に入り朝鮮

といふところは滅多に雨の降らぬ所と聞いてゐたが爲めに其音が何となく心に留まつた。けれども翌朝目を覺まして見ると大空は透き通るやうに晴れ渡つてゐて内地の秋の空よりも尙ほ清澄に見えた。さうして其空に一羽の鳥が飛んでゐた。

「鶴でせうか。」と妻は言つた。

鶴にしては少し小さいやうだが。と余も妻も共に暫く其鳥を見てゐた。鳥は唯一羽遙かなる大空を急がず騒がず南山の空の方を指して飛んでゐた。長い羽を靜に羽搏つてゐる趣が今朝の落着いた心持にしつくりとはまつて自ら其の鳥の行方が眺められた。

午前の間は夫婦で星野の宅を訪問して歸つた。星野は會社の用事が非常に多忙なので市中の案内が出来ぬのが残念だが剛三

と金夫人とに萬事頼んで置いたと言つた。

午後金夫人から景福宮や其他にも御案内したいし、某貴婦人にも御紹介し度いといふ事を電話で言つて來た。妻は少し考へた末、

「どうしませうねえ。」と余に相談した。

「兎も角一度行つて見たいだらう、お房さんも折角あんなにいふのだから。」と余は答へた。

「あなたはい？」

「僕は石橋にでも案内して貰はう。お前はお房さんに連れてつて貰う方が便宜が多いだらう。」

「さうねえ、だけれど貴婦人に紹介して貰うのは有難迷惑だわ。」

「其處は自由にしたらいいだらう。けれどもどんなものか一二

度紹介して貰つて見るのもよからうぢや無いか。」

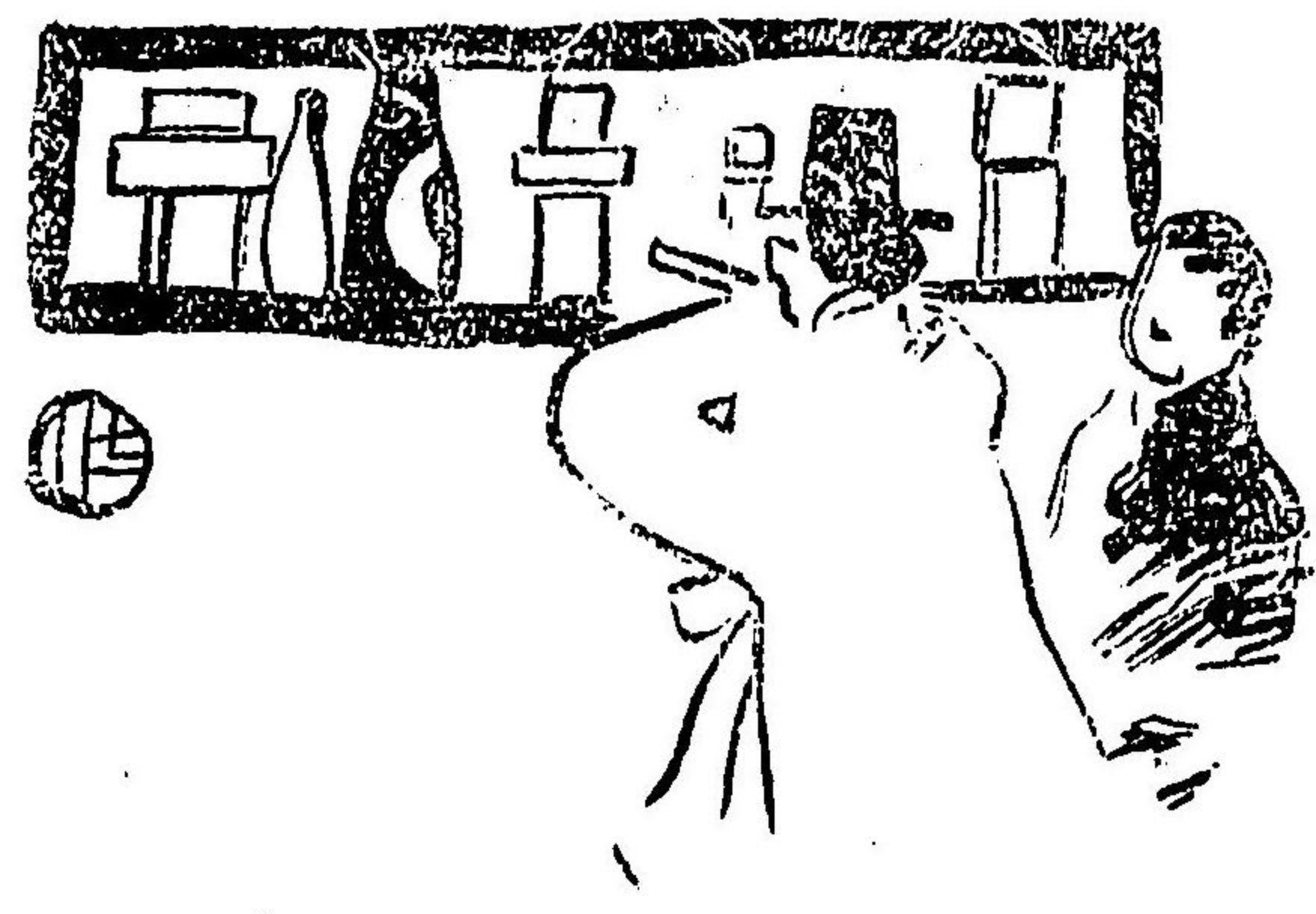
「さうねえ。」と妻は考へてゐたが遂に、

「お供を願ひ度うございます。」と返事をさせた。

九

妻と余とは此日以後別々の行動を取るやうな機會が多くなつた。二人が或は一緒に或は別々に王宮其他に案内された事などは一々叙する事を止めて、四五日を京城に費した後の二人はいろいろ違つた刺戟に何とも知れぬ心持のうちに彷徨うてゐた。大概な大きな建物にはまだ生々しい革命のあとを留めてゐた。日本人と外國人とのこんがらかつた争闘の歴史は大きな波の引い

たあとの渚のやうに到る處にくさくさの物語を残してゐた。
 或日珍らしく暇が出来たといふので星野に案内されて韓人町
 を歩いてゐると殆ど軒並朝鮮人の小店である中にふと一つの店
 先に日本人の子供と朝鮮人の子供とが日本語半分朝鮮語半分て
 話して遊んでゐるのを見出した。よく見ると其は日本人の小店
 て殆ど朝鮮人の店同様貧しげな汚いもの許りを置並べてゐたが、
 其でも其品物の並べやうが朝鮮人よりも真直ぐに整頓してゐる
 ところが稍々趣を異にし、三十餘りの女は汚ない日本服を着て狭
 い帯を締め店の奥に坐つてゐた。さうして其女は小さな鏡を左
 の手に持つて櫛を持つた右の手は埃だらけの其髪を梳きつけて
 ゐた。髪は根の下つた蝶々鬘であつた。星野は、
 「もう斯うなつちや日本人の方が朝鮮化してしまふのだ。」と言



て顔をしかめた。けれども此の朝鮮町の中に在つて見るもの聞
 くもの悉く朝鮮のもの許りて、さうして朝鮮人同様の汚い貧しい
 生活をしてゐて其でゐて矢張り日本の
 服を着日本製の髪を結び汚い埃の中に其
 髪を梳きつけてゐるのを見て余は必ず
 しも星野の言葉を信用しなかつた。其
 から暫く行くと又一軒の日本人の店が
 あつた。其は空氣銃を並べて向ふには
 巻煙草やビール瓶やいろく物の立
 て、置いて其を倒したものに其景品を
 興へるとになつてゐるらしく、白い服を
 着た朝鮮人は大勢其店先に立つてゐた。

一見朝鮮人と區別のつかぬやうな白い着物を着てゐた店の小僧は、

「君は屹度澤山倒すだらう。」と折節空氣銃を取り上げた一人の朝鮮人に油を掛けるやうに言つた。

「私ぺたゝから駄目だ。」と其朝鮮人は日本語で言つてねらひを定めて打つた。丸は巻煙草の箱に當つて危くゆれたけれども倒れなかつた。見てゐた朝鮮人は一齊に噓し立てゝ笑つた。其時、先生ですか。」と言つて突然後ろから余の肩を打つたものがあつた。見ると大邸の友人の果樹園で逢つた彼の新俳優の鶴見慶之助であつた。

「君もうこちらに来てゐるのか。」と余は驚いて言つた。

「え、先生にお別れした翌々日もう京城へ參つて開場して居り

ます。一つ新作の狂言を仕組み度いと思つて種を拾ひに歩いてゐるところです。」と言つて余の宿を聞いた。南山樓だと答へると、

「さうですか、其ては今夜にもお伺ひ致します。明治座で開場して居りますからどうか一度は御覽にお出で下さいませぬか。」と言つた。

十

石橋剛三の部屋にゐた女の素性はお京の口から明白になつた。これは矢張り浪人仲間て剛三の親友であつた男が東京から連れて來た愛妾であつたのだが、其友人が此間或事情の下に滿洲に旅

立つやうになつた。常人は深く決心するところがあつて、自分の愛玩して居つた書畫や骨董は一々友人に分配してしまつた。其から剛三には、

「君には骨董の代りに此奴を遣らう。」と言つて此お筆といふ女を連れて來た。

「馬鹿をいふ。」と流石の剛三も面くらつてゐたが、

「仕方が無い、兎に角預つて遣らう。」と言つて其儘引受けた。其友人は四五日前に滿洲に出發して、其からお筆は剛三の處に來てゐるのだ。と以上はお京の話であつた。

人を馬鹿にしてゐる。其て石橋は自分の妾にする積なのかい。と余は聞いた。

「石橋さんは多分自分が金を出してやつて自前の藝者にでもす

る積りなんてせう。貰つたのが災難でさあ。え、もとは新橋とかで一時は賣出した妓ださうです。泉屋の蝶花さんや菊子さん

は妹分になるんでせう。」

「道理で昨日泉屋では皆姉さん〜言つてゐた。」

「藝はあるさうですし、あの顔ですから出たら屹度流行るでせう。自前として出すには大分金が入るだらう。石橋にそんな金があるかな。」

「さあどうですか。」とお京は下らぬ事を氣にする男だと言つたやうに氣乗りのせぬ返辭をした。

「お筆の事は扱置いてお京さんの身の上話を聞き度いね。例の莞島事件など、お前は主な関係者の一人だといふぢやないか。」

「御戲談仰しやいませ。」と人を鼻であしらうやうにして、

「明治座でもお奢りなさい。さうしたら話してあげるわ。」と言ひ捨て、出て行つた。浪人仲間にも名の高いといふ南山樓のお京さんも植民地は植民地相應に、あゝ鶴見慶之助君などの一座を見たがるのかと、余は覺えず微笑を催ほして其あとを見送つた。今一つお京さんに就いて面白いのは、彼は男なれば石橋剛三の如きをも子供の如く取扱ふのであるが女となると余の妻の前などでもなんとなく勝手が違ふと見えて、存外眞面目にぎごちなさうにしてゐる事である。或時お京さんは余等夫婦の前でお給仕をし乍ら黙りこくつてゐるので、妻の方から話しかけた。

「伊藤さんもよく此宿にお見えになつたさうですね。」

「よくお見えになりました。」とお京さんは答へた。其から緒がほぐれて、お給仕の間お京さんは伊藤公の話をした。宋乗峻が何

處かて演説をした時に、

「とうぐわん閣下並にそくん……」と言つたとかで、到頭己を青物にしてしまつたと言つて公爵は笑はれた事もあるなど、言つた。此話には妻も余も噴き出して笑ひ話し手のお京さんも笑つたが、其後のお給仕の時には又前の如く改まつてゐた。余一人の時向ふより口を利いて人を愚弄するお京さんとは別人のやうに見えた。

剛三は何をしてゐるのか、何の爲に滞在してゐるのか、余には殆ど解釋が出来なかつた。其はお京に問うても明瞭に答へなかつた。何か又荒島事件に類することを畫策してゐるのかとも疑つて見たがそんな容子も見えなかつた。うちにゐる事は少く、ゐる時には必ず浪人組らしい男が二三人來て碁を打てゐた。お京も

時々其中に交つて無黙口を闘はしてゐた。例の女——お筆——は剛三の座敷にゐるよりも寧ろ帳場に坐つて女中の中に交つてゐる事の方が多かつた。

十一

妻は金夫人としてのお房さんの交際振りに感心してゐた。さうして又た自分に對する舊交を重んじて何かと便宜を謀つてくれ大官夫人の前などでも旨く取りなしてくれるのを感謝してゐた。其爲め初め頻りに躊躇したのと反對に此頃は大に氣乗りがして進んで此方から訪問することもあり又時々は泊ることなどもあつた。其爲め余よりも寧ろ見聞が廣くなつて徳壽宮内の石

造殿がどうだとかソソクホテルがどうだとか話してゐた。

「けれどもお房さんも随分苦勞もあるらしいですよ。第一金成龍さんの弟さんが大變な道樂者で、何とかいふ妓生を受出すことになつたとかいふ噂もあり、其には金成龍さんも困つてゐらつしやいました。」などと話したこともあつた。

余も一度挨拶の爲めに金成龍氏の宅を訪問したが、所謂上流韓人の住居で大門を這入り、中門を這入り、石階を登つて、其處の應接間に通され、卓子の上で珈琲を飲んだり、人參茶を飲んだり、又日本流の茶を飲んだりした。此應接間は元來大廳と言つて一番の大廣間として宴會などの時に使用されるのを今の主人公が西洋まがひの應接間としたのであるさうな。——妻の話の聞くと夫人の居間は全く日本流の疊を敷き、掛地生花茶筭等悉く日本のもの

て裝飾がしてあり、三人の子供の部屋も寧ろ日本風に出来てゐるとの事であつた。——けれども大門中門の左右にある列房からは韓服を着た老若が長い煙管をくはへてぞろぞろと出たり這入つたりしてゐた。是等の韓人は皆食客で少しにても縁の繋がつてゐるものは一族として皆家長の下に集つて來る習慣で、此家にも四十何人とかの食客があるといふ事であつた。

金成龍氏は洪さんとは大分趣を異にした人で、もう五十を過ぎた年齢の割に額に皺の多い洪さん程深刻な印象を與へぬ穩かな容貌の人であつた。尤も併合當時には比較的重大な責任ある地位に在つて苦勞をした人であつたのだが、夫人の賢だつた運動が却て災を爲して僅に從五位勳四等の宮内府の役人を膺ら得たに過ぎぬといふ噂もあつた。長く日本に居り、東京の地理は余の妻

よりも詳しいさうであつたが、其でも文學といふ事になつては全く無智識であつた。文學者といふものは矢張り此國でいふ昔の文章家のやうなものと心得てゐるらしく、此が私の先々人の詩文を集めたのだと言つて黄表紙の一つの寫本を取り出して來て見せたりした。さうすると余が妻の如きも所謂賀表を作り奏文を作る類の文章家の令夫人として此地の貴婦人間に紹介されてゐるのかも知れぬとをかしく思はれた。其日金成龍氏は、
奥さんをお泊め申すこともありまして御迷惑でございませう。
家内が其を何よりの樂みに致すものでございませうから。と言つた。其から又、

今日は生憎不在でございまして、まことに残念でございませうが、私の弟が文學を好みますから是非一度逢つて遣つて戴き度うご

「ございます。」と言つた。余は總てを快諾して歸つたが其弟といふのは妻の話した彼の遊蕩子の事であらうと思はれた。此日も妻は泊る筈になつてゐた。

其日宿に歸つて見ると余の部屋に鶴見慶之助が待つてゐた。さうして筆と京とは余の部屋に来て慶之助と話してゐた。二人は早くも慶之助の芳美團一座のものであることを知つて居るらしく、前日一二度見に行つたとかいふ其芝居が話題になつてゐたらしかつた。余が歸ると二人は間もなく下へ降りて行つた。

十二

「君が明治座にゐる芳美團の一人だといふ事を今の二人は知つ

てゐたのですか。」

「え、御存知でした。あの御婦人方はもう度々お見えになりましたから私の方でも存じて居りました。」

「さうすると君も此頃は舞臺にも出るのですね。」

「何分無人芝居の上を持つて来て、大邸から内地に歸つたものもありませんし、今又一一人病氣をして入院して居りますので遂に僕も止むを得ず登場するやうになりました。」と言つて優人として登場するといふ事を余の前では相變らず耻ぢて居るやうに見えた。

「先日話のあつた新作は出来ましたか。韓人町を寫すことは餘程面白いことと思ふが第一言葉が判らぬから芝居にするには困難だらう。其に此邊に久しくゐる人は君等よりも大分通人だから、其人等に見せるには内地の事を寫すより却て骨の折れるわけ

だ。併し旨く行きましたか。」と聞くと、

「駄目です。先生の仰しやる通り面白いことは面白いが手にをへません。矢張り小説でも焼直して茶を濁して置く方が僕の身上でせう。」と言つて笑つた。此時氣がついたが彼は少しく酒を飲んでゐるやうであつた。力めて酔態を現はすまいとしてゐるが目の白みに血走つたところがあつて笑ふ時の顔が怪しく赤味を帯びてゐた。

余は暫く無言でゐると彼は又文學談を始めた。けれども其は取るに足る談話では無かつた。

「相變らず新聞の切抜をやつてゐますか。」

「え、見たものは必ず切抜いて置きます。」

僕は近來餘り新聞も見無いが何か面白い文學界の出來事があ

りますか。

「朝日新聞に出た漱石の文藝委員論が近來痛快だと思ひました。僕等のやうなものでもあゝいふ議論を見ると一藝術家として自重せねばならぬ事を深く教へられます。何處迄も己を持して行く處は當代に匹儔無しですな。」と頗る敬服してゐたが、やがて余の記憶して居らぬやうな青年文學者の名をあげて、其人の前途が有望であるとか何某といふ小説家の何とかいふ作は其人の一轉機を示して居るものであるとか言つて余の意見を徴した。余は其には答へずに、

「明治座は矢張り毎日外題をかへるてですか。今夜は何を遣ります。」と聞いて見た。慶之助は袂を探つてゐたが、一枚の番附を取り出して、

「今夜のは大分芝居が、つた甘い物です。こんなものを先生に見られては閉口しますね。明晩は駄目ですが明後晩からは一つ正劇に立戻つて多少文學的價値のあるものを出します。」と言つてしぶしぶ其番附を出した。見ると血染廻雪全八場幕なしとあつて登場役者の名前が列記してあるが丁度中央あたりに鶴見慶之助とあつて上に女賊北海のお龍とある。

「君は女形をやるのですか。」と余は驚いて聞いた。

「僕は何でも遣ります遊軍ですから。」と言つて笑つた。

「場割とある處を見て行くと、其八雪中の枕橋に女賊の捕縛などとあつて、此北海のお龍なるものが自ら主人公らしく見える。

「君が主人公ですな。」と余は又驚いて慶之助の顔を見ると、
「なアに主人公なものですか。」と慶之助は苦笑した。此時よく

氣をつけて見ると目鼻立など尋常で、これ面白粉を塗つて鬘を被つたら美しくしい女形になるかも知れぬと思はれた。

慶之助は歸りがけに懐から原稿紙に書いたものを取り出して、
「發端だけですけれど御覽下さるわけには参りますまいか。」と言つて小説の原稿らしいものを置いて行つた。

十三

其は春の夜のやうな感じのする一夜であつた。月は鐘路の上高く掛つて居て朝鮮人は小さい燈籠のやうな提灯を提げて衣冠束帯で車を引いてゐるのもあれば被衣を被つた女の其青い袖の中から白粉を塗つた白い顔を見せてぞろ／＼と歩いてゐるのもあ

つた。余は石橋剛三と洪元善の二人に導かれて、徳壽宮の横から
各國領事館——もとの公使館——のほとりを散歩して、今此の鐘
路の通りに出たのであつた。剛三と洪さんの二人は先程から徳
壽宮の高い石塀を見上げたり、白楊の茂つて居る各國領事館の瓦
屋根を眺めたりして、閑妃没後の政變を話し合つてゐた。其計は余
に判る事もあり判らぬ事もあつた。其よりも余は別の事を考へ
てゐた。殆んど二人の話を上の空に聞き乍ら別の考をいだきつ
つ、いつと無く此鐘路の通りに出たのであつた。

今日慶之助が歸つた後、余は彼の置いて行つた小説の原稿を
讀んで見た。其は原稿紙五枚許りのもので、何でも長篇の冒頭ら
しく見えた。余は近來自分で筆を取る事にすら餘り興味が無い
のであるから、況して人の小説を讀む事などに興味のある筈が

無い。殊に頗る難澁な彼の文章を讀む事は堪へ難い苦痛であつ
たが、ふと氣まぐれに批評を試むる氣になり、出来るだけ細字で其
餘白に自分の意見を書加へはじめた。さうして二時間餘りを費
して殆ど全紙面を書きつぶしてしまつた。彼の原稿に認めた文
字よりも余の加した字數の方が寧ろ多かつた。

けれども、其後になつて余は何故に斯の如き勞作を爲したかを
自ら憐むだ。お京の話すところによると、慶之助は藝の方は可な
りだが舞臺顔は芳美、團中一番美しく、此地の藝者などでも大分
騒いでゐるものがあるとの事であつた。余は拭ひ去る事の出來
ぬ彼の眞黒の原稿を机の上に置いたまゝ、暮れ行く部屋にぼんや
りと考へ込んだ。世の進歩に取り残された文學者が、東京を遠方
に置いて唯恐れ縮かまつてゐる若い藝術家の草稿を添削する。

之を客観に置いて見ると憐れな滑稽な物語である。先刻二時間許り一生懸命に筆を握つてゐた其文學者の後姿が如何にも惘然に眺められた。其處へ余を散歩に誘ふたのが剛三と洪さんとであつたのだ。

鐘路の夜はまだ古い朝鮮の趣が七八分方残つてゐた。剛三と洪さんとは黙つて余を導いて、とある横町に這入つた。其は狹い町で丁度其町幅ほどの狹い川が流れてゐた。其處に這入つた時の心持は支那の詩で見馴れた狭斜といふ文字が思ひ出された。何々館といふ赤い文字の行燈が額のやうに掛つてゐた、其處には朝鮮料理屋が二三軒あつた。我等三人は其中の一軒に這入つた。

十四

妓生のうちの一人がまづ勸酒歌といふのを一節うたひ始めた。一句終ると他の二人も連吟した。其唄は抑揚の少ない水の流れるやうな淋し味のある唄であつた。三人とも此唄をうたひ乍ら余等三人に酒を勧めた。酒は粗末な日本の徳利に燗をした日本酒が這入て居つた。

「この唄はいつでも歌ふねえ。日本でいへばお座つきのやうなものだらう。」と剛三は言つた。

「唄の意味はどういふのですか。」と其唄が終つてから余は洪さんに聞いて見た。洪さんは、

「簡単に約束すると斯ういふ意味になります。」と言つて散文的に
譯してくれた。

「不老草を以て酒を醸し萬年盃に滿つる程注ぎ祝するに南山の
壽を以てす……。」

余はいつの間にかすつかり心持が變つてしまつてゐた。もう
慶之助の草稿の事なんか思ひ出さうともしなかつた。二人は余
を正座に進めたので余の後ろには凭れるやうな板があつて左右
には肘を凭す枕があつた。此板も枕も緞子でくるんだもので邯
鄲の枕でとり圍まれたやうな心持であつた。三人の妓生は一人
づゝ客の傍に坐つて絶えず酌をした。彼等の坐るのは片方の膝
を立て、紫の山を作り片方の足はゆるく投げ出して紫の丘を作
てゐた。

「貴様等も食つたがいゝ。見てゐる許りぢや可哀想だ。」と言つ
て剛三は笑つた。洪さんは例の悲惨な口許で淋しく笑ひ乍ら其
の意味を妓生に譯して聞かせた。

「どうも有難う。」と一人は日本語で答へて笑つた。

「どうも有難う。」と他の二人も日本語を使つて互に顔を見合は
せて笑つた。

ふと見ると眞丸い月が内庭の廂の間にかゝつてゐた。はじめ
より月だとは知り乍らも何か此部屋の裝飾のやうな心持がして
確と月といふ觀念を得なかつた。卓の上の御馳走は神仙爐の中
心にして日本では見たことの無いやうなもの許りであつた。妓
生の額は人工的に美しく形づくられてあつた。壁間には支那の
丸い團扇が掛けられてあつた。天井からは嬰珞のやうな飾の多

い釣りランプがぶら下つてゐた。其間にふと目に這入つた月は、たしかに其を月だとは知り乍らも其處に突立つた朝鮮人のポールの黒い筒形の烏帽子の後ろに自ら書かれた裝飾畫としか見えなかつた。

「今日は君の爲めに純粹の朝鮮踊を見せてやらうと思つて樂人を呼んで置いた。何か一つ遣れ。」と剛三は命令を下した。

樂人といふのは大方六十以上と思はるゝ老人許りであつた。其が部屋の間の方に居並んで器樂を奏し始めると妓生の一人は男の服装をし一人は女の服装其の儘で踊り始めた。踊りといふよりも雅樂に近いやうな舞であつた。互に纏綿たる情を手足の運動に現はして、或時は抱擁して泣くやうな料もあつた。器樂は日本の樂器と似寄たやうな形のものであつたが洪さんは一々其

名を説明してくれた。十三絃の琴は一人の老人の膝の上に載せられて彈かれた。其を洪さんは伽耶琴だと教へてくれた。又支那ていふ琴瑟の瑟は此伽耶琴をいふのだと言つた。今一つ日本で筆築のやうなものを洪さんは洞簫といふと言つた。

「さうすると客に洞簫を吹く者ありといふのはあれですね。」と聞くと、洪さんは、

「さうてございます。」と點頭した。

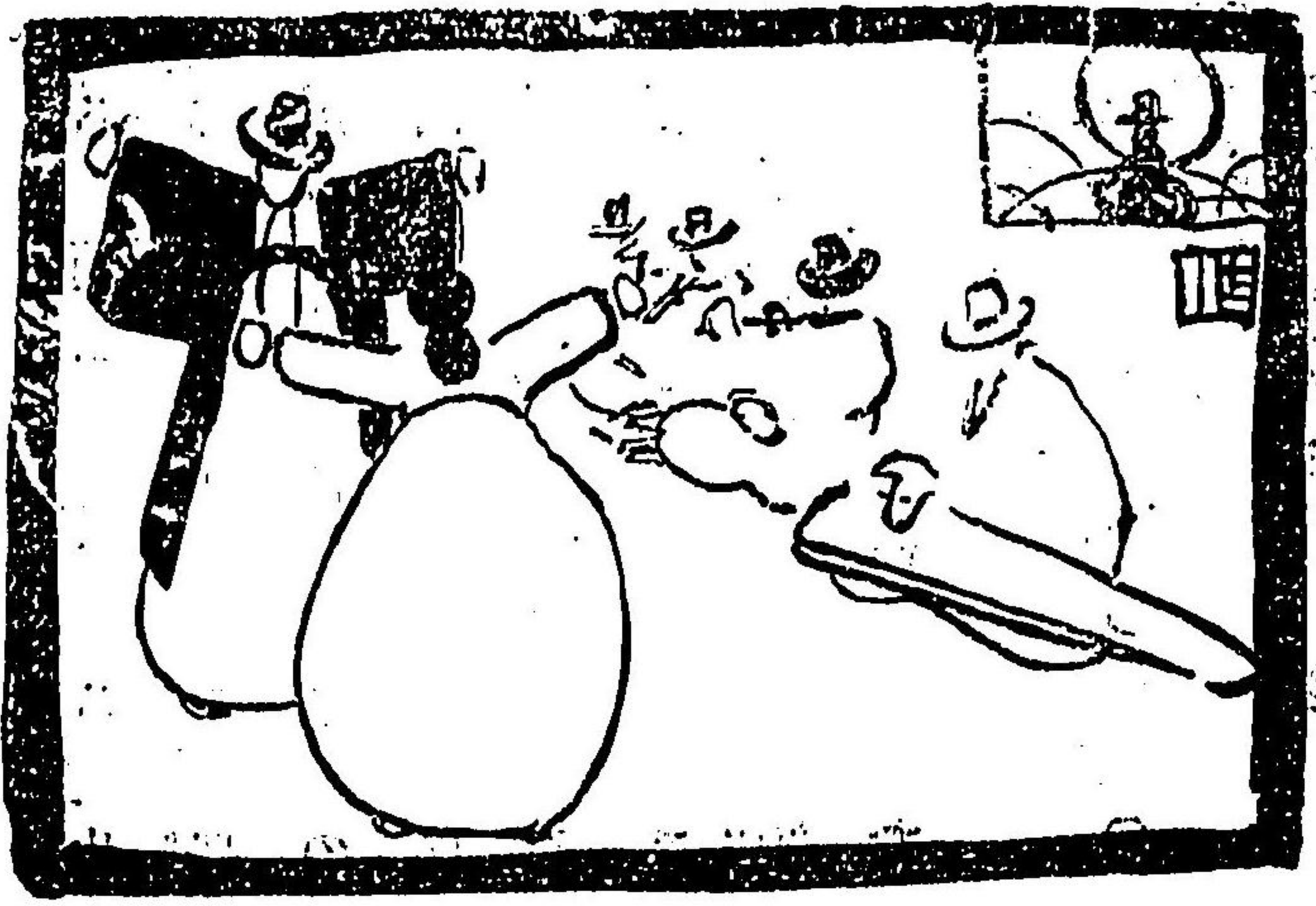
「あの長大な鼓のやうなものは何といふのです。」

「あれは矢張り長鼓と申します。」と答へて洪さんは熱心に此音樂を聞いてゐたが、

「この音樂も此年寄が死んだらどうなるかわかりません。もう幾人も居りませんから。」と云つて歎息した。長鼓は膝の前に置

いて片方を手で打ち片方を撥で打つた。其長鼓をうつのは腰の曲つた七十許りの老人であつた。 六八

器樂の節奏は悠長に續いて、男女纏綿の抱擁は三度も四度も繰り返された。ふと氣がついて見ると、後ろの高い窓に澤山の朝鮮人の顔が重り合つて渦巻いてゐた。渦巻いてゐるといふよりも重り合つてボンヤリと中を覗いてゐた。洪さんが言つたやうな即て亡びて行く此器樂の音に引かされて彼等は此處に集ひ來つたものであらうか、其とも亦た彼等の懶惰の時間を費すに此上無きものを引出していつ迄も其處に突立つてゐる積りなのであらうか。何にせよガラスを透して見える澤山の顔の後ろには尙數限りも無き多勢の人が殆ど門外迄も立ち盡くして、此器樂の音の



聞える限りには立止つてゐるやうな心持がした。此舞を男舞といふと洪さんは説明した。男舞が濟んでから妓生等は再び余等の間に坐つて酌をした。其間樂人の老人共はどこか物蔭に消えて無くなつてしまつてゐた。余の傍にゐた妓生は箸の先に一片の肉を挟んで余の顔の前に持つて來た。余は心得て口を開けると妓生は親が子にはごくむやうに其肉を余の口の中に落として呉れた。

見ると剛三の傍にゐる妓生も同じやうな事をしてゐる。剛三の
髭の生えた大きな口を無器用に開けてゐる處が餘所目にはをか
しかつた。これも洪さんの説明によると朝鮮の兩班どもは唯口
を開けるばかりで物を食はずから酒を飲まず迄悉く傍に在る婦
人が之を司る事になつてゐるのださうな。余も剛三も矢張り其
取扱を受けつゝあるのであつた。妓生等は又唄を歌つた。其唄
の調子もさきの器樂が余等に與へたと同じやうな平板な悠長な
感じを與へるものであつた。其唄の意味をあとして洪さんが譯し
て聞かせた。

「玉の如き主を失つて、主の如き君に逢ふ。主君が君主か。誰か
我知らん。」

余等は大分酔た。剛三は先刻から僅に知つて居る朝鮮語は皆

使つてしまつて何か下卑た事を日本語で言つたが其は妓生には
通じ無かつた。

「君通辯して呉れ。」と剛三は洪さんに所望したが洪さんは其を
厭とも言はず落附いた言葉で例の悲惨な口許を動かし注意深い
目で妓生の顔や余等の顔を等分に見乍ら通辯をした。妓生は矢
張り日本の遊女などと同じやうに嬌笑を洩して何か其に答へた。
其を洪さんは又前のやうに落附いた言葉で悲惨な口許を動かし
て日本語に譯した。其洪さんの口から譯されて出る日本語は何
となく眞面目に響いて余等は笑を待設けてゐ乍ら笑はうとは思
はなかつた。之から推すと洪さんに譯されて妓生等の耳に傳は
つた朝鮮語も恐く剛三の口から出たものとは大分心持が違つて
ゐたらうと可笑しかつた。又政治家として雄辯家として私に自

ら任ずる洪さんの身にとつて斯る通辯の苦痛は想像に餘りあることであつた。其から又老樂人等は現はれて樂を奏し、僧舞といふ舞を一人の妓生が舞つた。之は僧が女に執着して墜落する状態を寫したものとみて、初めは静かなる音樂に連れて、手足を延ばしたり縮めたり暫く單調と見ゆる動作を續けつゝあるのが終りに近くなると、樂人の打ちつゝあつた太鼓を二人の男が抱へて妓生の傍に持つて行き、妓生は撥を左右の手に持つて物狂はしく其太鼓をうつ動作をした。余はもう其單調な器樂の音に稍々飽いて彼の窓を見上げて見ると朝鮮人の顔は相變らず重り合つて靜かに此舞を見てゐた。

此時妓生の一人は彼の月を印してゐる内庭を隔てた別房の方

を何か用ありげに時々注視してゐた。僧舞を舞てゐる一人の妓生が二本の撥を種々の形に動かして乍らだんく急調に太鼓をうつ處は、洪さんは固よりの事最前から其單調に稍倦んでゐた剛三も余も、流石に其舞に心を牽かれてゐたに拘らず、其一人の妓生は別房の方にのみ氣を取られてゐるらしかつた。さうしてまだ僧舞の終らぬ前に彼女は立上つて遂に其別房の方に行つてしまつた。洪さんは其後を見送つて苦笑した。

上

僧舞が終ると再び又新らしき爛徳利が運ばれたが満を引いて飲むのはもう剛三許りであつた。妓生は又唄を歌つた。例によつて洪さんは譯して聞かせた。

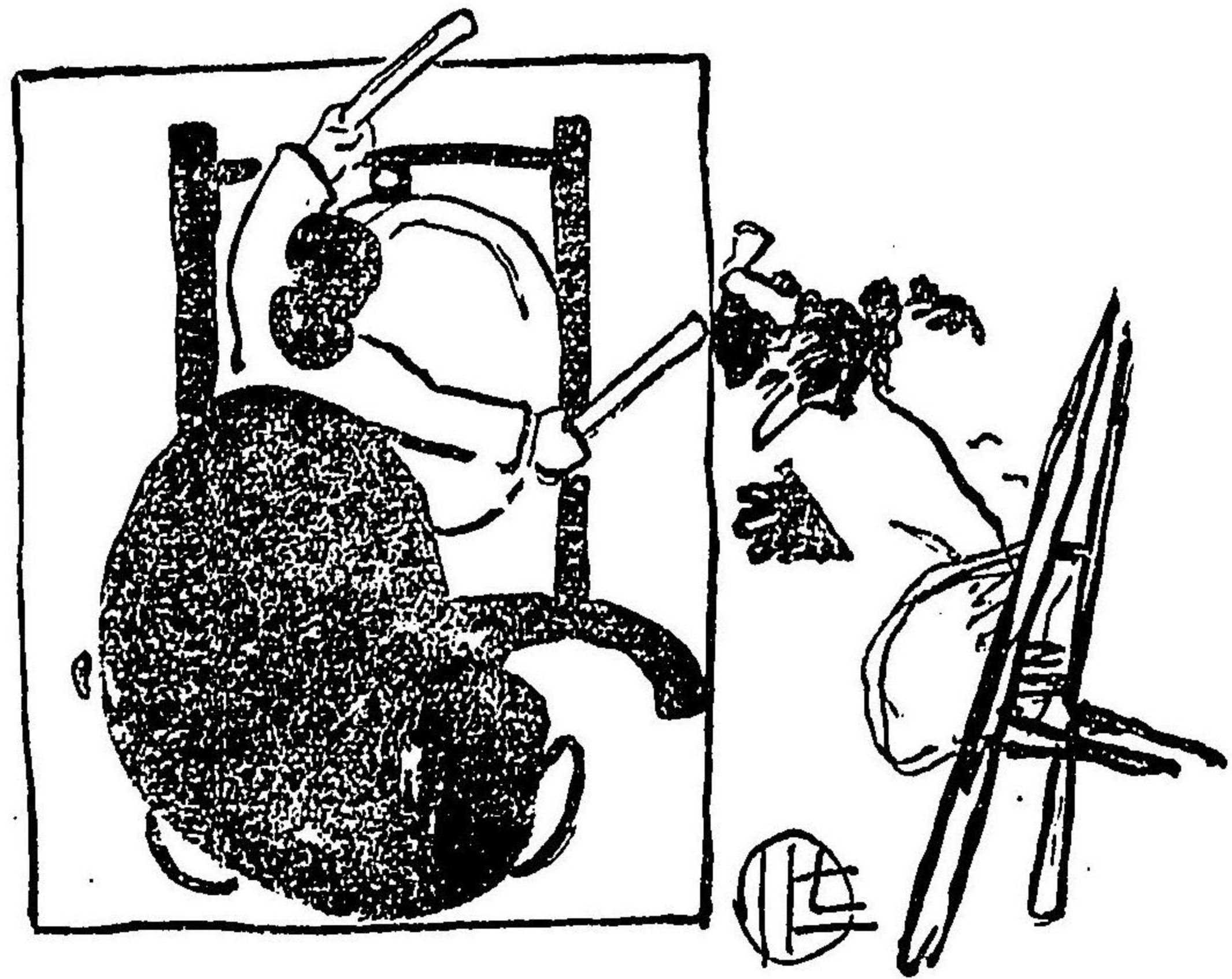
百遍餘り讀んで胸の上に載せた。

中

格別重くないけれど胸が鬱陶し。

けれども一人の妓生を缺いて何となく其唄は淋しかった。

「さつき向ふへ立つて行つた妓生が素淡と言つてもう老妓では
ごさいますが、あれで有名な妓生でございませう。あの妓生がゐな
いと此二人だけでは唄でも本當に面白くは聞かれませぬ。」と洪
さんは言つた。成程其素淡といふのはさつき男舞の時男の方に
なつたので女の方になつた若い妓生に比べたら其技に餘程の懸
隔のある事は余等の眼にも明に映つた。けれども一寸見たとこ
ろはまだ二十四五にしか見えなかつた。日本の女でも朝鮮の女



の服装をみると若く見えるといふやうな事を聞いた事はあつたけれども、老妓といふのは一寸受取れなかつた。

「あれでもう老妓なのですか。」と洪さんに聞いて見た。

「さうでございませう。もう三十近くにもなつたら朝鮮では老妓の方でございませう。」と洪さんは答へた。

「奴さん頻りに別房に氣を取られてゐたやうだつたが色男

でも来てゐるのかな。」と剛三は丹のやうに赤くなつた顔に子供らしい愛嬌を湛へて聞いた。

洪さんは例の悲惨な口許を暫くもぐもぐさせてゐたが、一寸眼を光らせて其別房の方を見て、

「あそこに来てゐるのが、あの金成龍の弟で仕方の無い遊蕩兒でございます。素淡と関係があるやうな事は今迄別に聞かなかつたですが……」と言つた。金成龍の弟といふのは曾て金成龍から文學好として特に余に紹介する筈になつてゐるあの男の事に相違無かつた。

其うち知らぬ風をして歸つて来た素淡を捕へて、

此馬鹿野郎、怪しからん奴だ。」と言つて剛三は盃をさした。洪さんは白味の多い眼を光らせて素淡の顔を見乍ら何か調戲つて

ゐるやうであつた。素淡は流石に少し顔を染めて其に答へてゐた。其うちに其ぼんのくぼ邊で束ねた髪にさしたものを抜き取つて洪さんに渡した。洪さんは其を余等に示しつゝ、

「此素淡はこれでも昔は從二品の位であつたので、其時にこれを皇帝から貰つたのださうでございます。」と言つた。手に取つて見ると純金で製へた笄のやうなものであつた。

其から又劍舞といふ舞を若い二人の妓生で遣つたが、餘り面白くも思はなかつた。其よりもこれから從二品の素淡の家を訪ふといふ事に評議が一決して其旨を素淡に通ずると、素淡は頗る迷惑らしい顔をして又別房の方を意味ありげに見た。けれども洪さんは承知しなかつた。

表に出て見ると鐘路通りの人影は少くなつて月は愈々明るかつた。素淡は余等三人に交つて氣が進まぬやうな風に歩いてゐたが遂に立どまつて洪さんを呼止め何か囁いた。洪さんは容易に承諾するやうな風は無かつたが即ち少し離れて立どまつてゐた余と剛三との方に歩いて来て笑ひ乍ら斯う言つた。

「素淡が申しますには、今夜は少し腹が痛くなつて来たからどうか明日にして下さるわけには参りますまいか。」さう言つて洪さんは言葉を切つて余等の返辭を待つてゐた。剛三は、

「可愛さうに、到頭腹が痛くなりやがつた。もうよい加減にして

放免してやるさ。」と言つて笑つた。見ると四五間離れた處に素淡は月の光を浴てしよんぼりと突立つてゐた。襟元に束ねられた髪の内ら作つてゐる曲線の形が裾の方に廣がつて居る裳の流と共に遠目に面白く見られた。即ち洪さんが大きな聲で何とか言ふのに對して、此離れた人影は此方を注視して時々返辭をした。さうして丁寧に辭儀をして分れた。

余は何となく物足らぬ思がした。三人でとぼくと何の當もなく西大門の方に歩いた。洪さんは、

「此先に四融社といふ芝居小屋があります。御覽になりますなら、お供致しませう。」と言つた。余は早速、

「其は是非お供を願ひませう。」と言つた。

「もう河時になるかな。」と剛三は時計を取出して月光に透かせ

て見た。それから。

「まだ割合早いね、十一時前だ。」と言つた。三人は遂に其融社といふ芝居小屋の前に立つた。

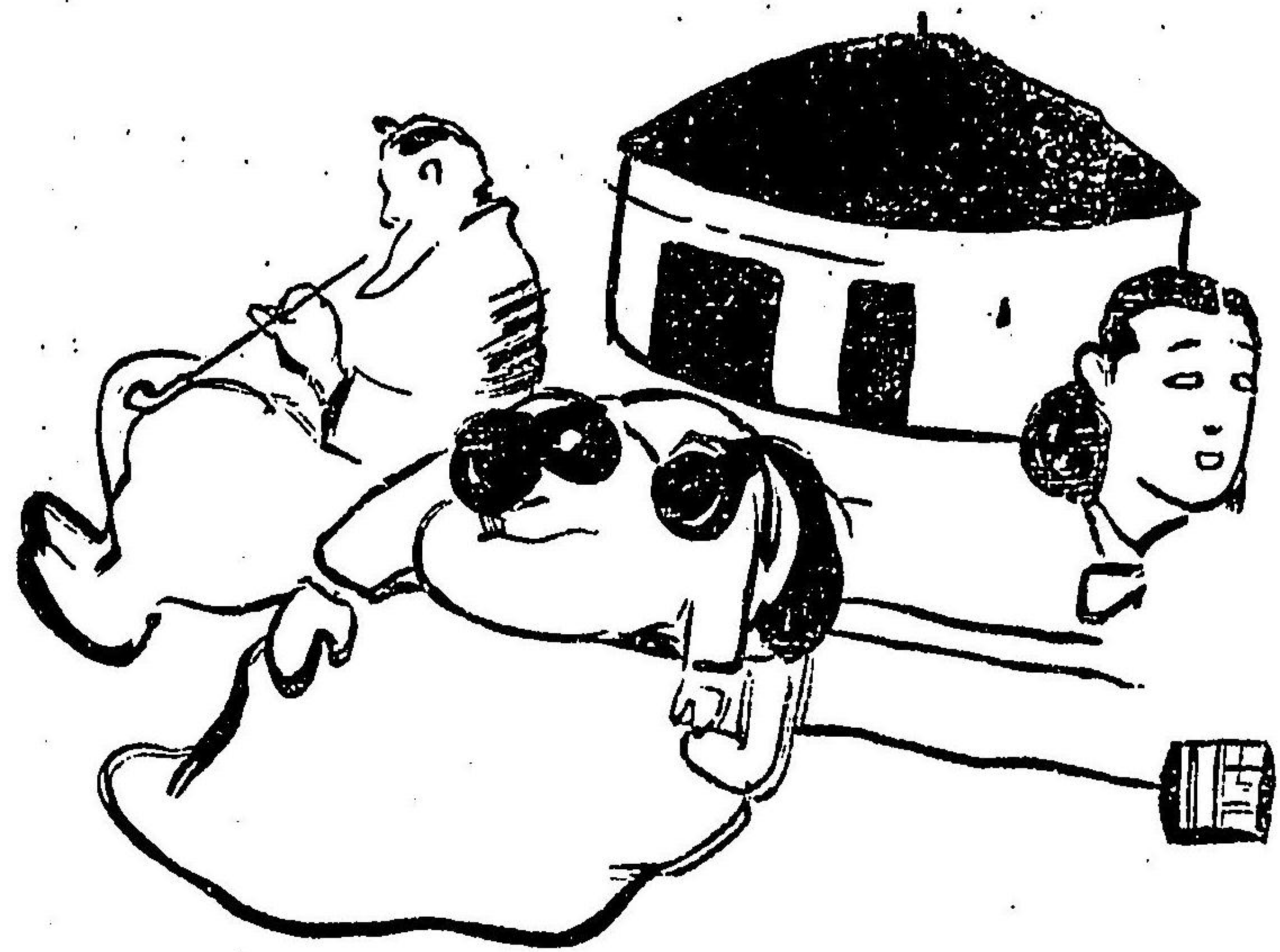
小屋の前はまだ流石に賑かに見えた。余はいつ迄も歡樂を追ふて歩き廻つた書生時代の心持を呼び起こしつゝ——十一時にならうが十二時にならうが眠る事も疲れる事も忘れて灯火のある處を追うて歩き廻つた其當時の心持を呼び起こしつゝ——切符を買つて中に這入つた。

圓形の建物は西洋風を加味したものであつて後ろ程高くなつてゐる見物席には多くの朝鮮人が静に見物してゐた。舞臺には二人の總角と三人の大人とが向合つて一寸聞くと盈踊の唄と思はるゝやうなものを合唱し乍ら各々手に持つたり首に掛けたり

してをる樂器を騒々しくうち鳴らしてゐた。洪さんの話す處によると此處は芝居小屋とはいふものゝ今は寄席のやうなものになつてゐるので音樂もやれば妓生の踊もあり支那人の手ずまのやうなものもあるとの事であつた。余等は一番後ろの高い處に腰掛けの空席を見出だして坐つた。其處も朝鮮人が腰を掛けてゐたのが余等を見て席を譲つたのであつた。見渡した處日本人は余と剛三計りて場内の朝鮮人は皆不思議さうに我等を見上つた。又男女の席は嚴密に區分されてゐて女の方の席にも存外多くの婦人が顔を列べてゐた。洪さんの話によると是等は皆兩班等の妾であつて一人も正しい細君は居らぬと言つた。

舞臺の騒々しい囃子は容易に終らなかつた。洪さんは、「こんなものは仕方がありません何か面白いものに早く換へれ

ばいゝに。」と氣をもんでゐた。けれども余は舞臺よりも見物席
 の方により多くの興味を見出しつつ彼等朝鮮人の男女が如何な
 る心持て是等の演藝を見て居るかを知り度いと思つた。彼等は
 静肅にぼんやりと唯だ其音楽を聞いてゐた。丁度余等が見下す
 眞下の處には子供を負つた一人の總角が腰掛の上に打伏になつ
 て寝てゐた。負さつた子供も其儘に寝てゐた。すぐ其横に腰掛
 てゐる朝鮮人は長い煙管の雁首を膝小僧の上に載せて握り時々
 口から煙を吹き出しながらいつ迄も静に舞臺の方を見てゐた。
 女の席の方も皆格別外見もせず種々の色をした裳を兩手で抱く
 やうにして一齊に舞臺の方を見てゐた。其時ふと今丁度這入つ
 て来て後ろの方の席に着かうとする一人の女が眼に這入つた。
 其は遠目ながら慥に素淡に相違なかつた。



彼のたしかに素淡に相違無
 いと思はるる女は余等が此處
 に在るものとは夢にも心附か
 ぬらしく暫く腰掛に腰を掛け
 てゐた後立ち上つて階段を下
 り其處から舞臺を横ぎつて樂
 屋の方に行つた。見物席から
 樂屋の方に行くにはどうし
 ても舞臺の上を通らねばなら
 ぬのであつた。其時舞臺の上
 ては六人の妓生が牡丹の造花

を中央に置いて其周囲を踊り廻りつつあつた。素淡が其後を横
ぎる時其等の妓生は各々素淡を見て會釋をした。其れが舞臺の
上であるのかたゞの場處であるのか區別がつかぬ程平氣な態度
で會釋をした。

「奴は素淡ぢやないか。」と剛三は漸く其と氣附たらしく言つた。

「素淡はあの金成龍の弟と一緒に來たのでございませう。あの
男の席の後の方に腰掛けたのが其れに違ひ無いやうでございま
す。」と言つて洪さんは其光る眼をちつと其方向に遣つた。

舞臺の上の妓生の踊は先刻朝鮮料理屋て見た素淡などの比
べると尙遙に幼稚なものであつた。六人の妓生は各々一枝の牡
丹を折つて其を翳して踊るのであつた。剛三はいつの間にか腕
を組んだ儘で居眠をしてゐた。

一度樂屋に這入つた素淡はもう二度と見物席の方へは出て來
なかつた。金成龍の弟もいつの間にか居なくなつてしまつたと
洪さんは言つた。彼等は余等の來てゐる事に氣がついて又此處
を外したものであらうと思はれた。

剛三は肝をかいで寝てゐた。余ももう此處を出度いと思つた
が洪さんは此次が支那人の手づまで其が一番面白いからと熱心
に待設けてゐたので歸らうとも言はずにゐた。

成程支那人の手づまは面白かつた。一人の支那人は不思議な
大きな聲を出して何とかいふと朝鮮人は皆笑つたが余には其意
味が判らなかつた。

「あれは朝鮮語ですか。」と洪さんに聞くと、
「さうでございます。」と洪さんは答へた。やがて其の支那人は

一つの大きな茶箱のやうなものを持出して正面の机の上に据ゑ、其箱の中を見物人に示して何にも無い事を證明して置き、忽ち其中から種種のものを取出して見物の喝采を博した。空箱の中からものを出すと云ふ事は日本の手づまと變りは無かつたが、唯其函が極めて大きな函で、其中から取出すものも大きな枯れた鉢植や、大きな汚ない盥などであることが日本の手づまの小奇麗なものと比べて大國的に見えた。殊に支那人は汚れ垢づいた服裝をしてゐたが、しまひには其上衣を脱いで肌を現はし、辮髪を蛇の如く首に巻きつけて其端を口にくはへなどして、勢込んで遣るのが異様に見えた。噺子は鉦や太鼓の遣入つた極めて殺伐な騒々しいものであつた。朝鮮人の音楽や踊の單調で悠長なあとに出て來たので、此刺戟の強い噺子や演戲は頗る人の心を引き立てた。



其の次は又支那人の熊使であつた。一つのよく馴らされた熊が支那人の命令のもとに後足で立上つたり、つべ返りをしたり、棒を遣つたり、其他いろいろの藝當をして、其都度杓に一杯づゝの御馳走にありついで、異様な聲をして吼えた。其聲はいかにも猛獸的で、氣味悪く響いた。平生饑やされてゐて、僅の御馳走にありつく爲めに種々の藝當をして悲しく吼え立つる猛獸の聲と、其猛獸を

叱咤する支那人の聲と其を喜んで囃し立つる朝鮮人の聲とが打交つて異様な感じを人に與へた。見ると洪さんは頗る興に入つたらしく、今迄に餘り見たことの無い熱のある顔附きをして熱心に舞臺を見詰めてゐた。剛三は猛獸の聲にも負けぬやうな聲をかいて熟睡してゐた。

熊使が濟んでから又た朝鮮人が四五人舞臺に現はれて例の樂器を鳴らして單調な音樂を奏しはじめた。余等は剛三を起して表に出た。月は傾きながらも愈々明かに夜涼は肌寒を感じる程であつた。剛三は頻りに大きな欠びを大空に向つて連發してゐたが、これから突然素淡の家を驚かして遣らうといふ洪さんの動議に余が直ちに賛成したので、

「文學者と一緒に歩くのはもうこり／＼した。」と言つて笑ひ乍

ら其ても素直に人のあとに跟着來た。

十六

朝鮮人は夜はいつまでも起きてゐて朝はいつまでも朝寢をすると聞いてゐた。洪さんは眠さうな顔もせず例の色の褪めたフロックコートを着た長い體を月下にとぼ／＼と運ばせてゐた。剛三の欠びは尙ほ暫く止まなかつたが眼が醒め切つてからは又元氣が出た。

今日は文學者を案内して遣る積りであつたのが到頭文學者に引ずり廻される事になつた。不思議なところへ來たね。」と言つて其邊を見廻した。何でも鐘路の通りから横に這入つたところ

て朝鮮家屋のみが並んでゐて其町の突當りに宮殿や廟などに見
るやうな赤く塗つた大きな門があつた、

「これはどこの門です。」と聞くと洪さんは、

「此門の後がさつき見た領事館になつてゐます。」と言つた。門
にかゝつてゐる額は白く月の光に見えたが其文字は讀めなかつ
た。洪さんは其門に突當る前に更に小さい横町に這入つた。其
處も固より朝鮮家屋許りであつて、軒並の濶突からは煙も出ず悉
くひつそりと寢静まつてゐた。

「此家が初月のうちでございました。」と洪さんは言つた。初月
といふのは一番の美人といふ噂のあつた妓生で近く朝鮮華族の
何某に落籍されて妾となつたのだといふことは嘗て聞いてゐた。
見ると穢い家で、これが果たして妓生の家かと怪しまるゝ許りて

あつた。洪さんは更に余等を小さい横町に誘つて、とある一軒の
門の前に立止まり暫くうちの容子を伺つて後ち其門を叩いた。

家はまだ寢てゐなかつたのであらう間も無く返辭があつた。家
のうちに奥まつて聞える聲と月下に立つて居る洪さんのあらは
な聲とは其れから二三度推問答をした。其うち門を開けて姿を
現はしたのは老婆でも下男でも無く素淡其人自身であつた。服
装はささの水色絹の上衣でも紫の裳でも無く上衣も裳も悉く眞
白で、其が月の光を受けて我等を見上げた姿が、ささの初月の家同
様穢い朝鮮家屋を背景にして殊に艶に美しく見えた。さうして
余等の何人であるかを慥かめた時兩手を裳にかけて其上にゆ
り上げる様な動作をし乍ら「アイゴ。」と泣きさうな聲を出した。
余は嘗て斯ういふことを聞いてゐた。或情夫が妓生のうちを

訪ねた時、其門が締まつてゐたならば其は已に一人の情夫が来てゐるといふ證明になるので、あとから来た情夫は外から聲を掛け自分は今後来て来た爲に這入ることが出来ぬのを残念に思ふといふと、前から来てゐる情夫は其は誠に氣の毒だ、自分は今から歸つてもよいから、貴方代りに這入つて泊つたらよからうと答へ、あとからの情夫、いや其には及ばぬ、自分は今から歸るから幸福な一夜を静に臥めといひ、同じやうな禮讓ある言葉を更に二三度双方より繰返し、結局あとから来た情夫の方が引返して歸ることになる、これが儀式のやうになつてゐるといふ、さういふ話を聞いた事があつた。けれども此場合の光景は其とは全然相違してゐた。

余は今迄讀者に告げることをしてしなかつたが、洪さんの前後の容

子から察すると、洪さんは或は素淡の情夫の一人かも知れなかつた。泉家では餘り笑もしなかつた洪さん、朝鮮料理屋に在つても初め剛三の下卑た洒落を厭々乍ら通辯した洪さん、何事にも冷静に用心深く見えてゐた洪さんが、一旦金成龍の弟と素淡との關係を認めてからは何となく無用心に執念深く素淡のあとを追ふやうに見えた。彼の圓融社に素淡の來るといふ事は、恐らく洪さんの豫期してゐたところで、其爲め余等を彼處に誘つたものとも解釋することが出来た。此夜更けに此家へ來たのも亦略其心持を諒解することが出来た。

素淡は暫く洪さんと話し會つてゐた。洪さん一人ならば兎も角、余等二人の日本人の交つてゐるといふ事が素淡に取つては餘程の苦痛らしく見えた。彼等二人の話し合つてゐることが如何

なる意味のものであるかは解らなかつたが此際余と剛三とはぼんやりと其談判の結果を待つよりほか致し方が無かつた。其時驚いたのは突然門内から衣冠束帯の朝鮮人の現はれ來つた事。其も一人や二人でなく殆ど四五人も引續いて現はれたのが皆格別余等の方を見るでもなく風の流れるやうに知らぬ風をして表へ出てしまつた。

多勢の朝鮮人の門外に流れ出たあとで余等は素談に導かれて家へ這入つた。月光で見る内庭の模様は充分に判らなかつたが其は餘り廣くは無く夜目にも穢いやうに思はれた。其でも妓生の住居は普通の人の住居よりも美しくしいのだと聞いてゐた。之が美しくしい方ならば普通の人の住居の穢さが思ひ遣られた。素

淡は先に立て一つの離のやうになつてゐる房に這入つた。其處には照り返しの附いた眞鍮の燭臺に白い蠟燭が點つてゐて、其處に坐つた素淡の横顔を明るく照らした。房は一間半の狭い室で一方に眞鍮の金具の着いた朝鮮式の箆筒が二棹並べてあつた。さうして其一つの方の箆筒は上の戸袋の戸がガラスに彩色を施したケバ／＼しいものであつて、其上には白粉の空瓶と思はるゝものが十許りも並べてあつた。

「これは朝鮮の女の癖でございます。何でも少し美しくしいものは無暗に並べ立てるので何の趣味もありません。」と洪さんは言つた。古びたレツテルが行儀正しく正面を向いて揃へられた處はどうしても田舎の床屋などで見えるやうな光景であつた。其他其處に置かれた鏡臺でも金唐函のやうなものでも皆余が稚い時

年とつてゐた母のを見たことが思ひ出せるやうな油染みに古びたものであつた。白粉を白く塗て髪を一条亂さず綺麗に梳きつけた素淡と此の鏡臺とはどうしても不調和に感ぜられた。先刻洪さんが素淡を老妓と言つた言葉が此鏡臺などに對しては決して不穩當で無いやうにも思はれた。

剛三が洪さんに渡した金を洪さんから受取つて素淡は庭に降りた。内庭を隔て、臺所や下人のゐる房などは別にあつた。素淡は其處に行つて何か命じてゐるやうであつた。

「こんな夜更けになつても食ふものを命ずることが出来るのですか。」と余は洪さんに聞いて見た。

「氣の利いたものは出来ませんでせうかビールに何か一つ位のお肴は出来ませう。」と洪さんは言つた。さうして素淡の居

らぬ間に洪さんは鍵のかゝつてゐない箆筒の抽斗や鏡臺の抽斗や、其他戸棚や箱などの蓋を悉く開けて見た。大方たいした内容物は無かつた。鏡臺の抽斗からは雲脂のたまつた櫛や手にするものも穢いやうな汚れた笄のやうなものが出た。余はさつき古びた鏡臺を見た時は幼い時見た母の鏡臺を思ひ出したと言つたが、此の汚れた櫛や笄を見た時は亡くなつた祖母の鏡臺の抽斗を年

経て後開けて見たやうな心持であつた。
「斯んな物がありました。」と言つて洪さんは何物かを剛三に渡した。見ると其は繪葉書のアルバムであつた。剛三は其を手に受取つたが二三枚開けて見て興味も無さそうに下に置いた。續いて洪さんは一つの小さい函の中から花札を見出して其を余等の前に持出した。其は日本の花札であつた。剛三は其を取り上

げて、

「奴等これを遣るのかな。」と不思議そうに言った。

「一體勝負事は好きでございませうから盛んに遣ります。」と洪さんは答へた。聽て素淡は席に復して其處等に取散されてゐるものをちらと見たが別に何とも言はなかつた。チョンガの運て來た竹の脚の附いてゐる茶ぶ壺のやうなものを並べて其上にビールを三四本と蕎麥の鉢を人数程並べた。蕎麥は朝鮮蕎麥で唐辛子や芹などが澤山に這入つてゐた。

「お上りなさい。」と素淡は日本語で言つて笑つた。さうして又朝鮮語で何とか言つた。洪さんは、

「お口に合はんでございませうが召上つて下さい。」と其を日本語に譯した。

余等は下等なコップに濁つたビールを注いで貰つてガブ／＼と飲んだ。蕎麥はつとめて食つたけれども唐辛子の辛い上に脂臭い臭氣があつて旨いとは思へなかつた。照り返しの光を半面に受けてゐる素淡と洪さんは其を旨さうにして盛んに食つた。

さつき洪さんが抽斗や戸棚を掻き探してゐた時余等の眼にちらと映じたものはとある戸棚の中に深紅の夜具の積み重ねられてあつたことである。其時洪さんは朝鮮語で何とか言つて急いで其戸を締めてしまつた。今蕎麥を一箸二箸厭や／＼乍ら食つて其儘箸を投じた剛三は、のそ／＼と立上つたと見ると、いきなり其戸棚を開けて其深紅の夜着を引出した。素淡は、「アイゴ。」と言つて箸を持つた儘あつけに取られて見てゐた

が別にどうすることも出来無かつた。剛三は傍若無人に悠悠と一枚の布團を延べて其上に横になつた。狭い部屋の片隅に斜に敷かれた赤い布團は面白く余の眼に映つたが其よりも剛三の其上に仰臥して一言も發せず黙りこくつてゐる容子が一段と興味があつた。剛三は慥かに眠つては居なかつた。彼の眠りは圓融社を出てから月下に連發した欠によつて今は全く覺めてゐるに相違なかつた。彼の酔も亦た冷たい月の光によつて冷却されたに相違無かつた。素淡が許の濁つたビールは幾ら満を引いても再び彼の酔を呼び戻すには足らぬらしかつた。彼は覺醒した體を恰も眠れるかの如く赤い布團の上に横たへてゐるのであつた。彼は何をしに朝鮮に來てゐるか。殆ど彼を主謀者としての浪人組の活動は何を意味するか。彼は洪元善と何事を爲すべく結托

しつゝあるか。多少とも其處の消息を語るものは此の赤い布團の上の肉塊であつた。素淡と洪さんとは又た朝鮮語で何かを喋り合つてゐた。素淡と洪さんとが如何なる關係の下に在るかも亦余に取つて興味ある問題であつた。日韓併合の前後に頻出した兇徒には必ず妓生が色彩を添へてゐるといふ事であつた。彼等は月下に笛を吹いて別を惜んだとか暮夜に船を盗んで共に姿を暗まさらうとしたとかいふやうな物語めいたことを實行してゐた。けれども洪さんは斯る淺慮客氣の若者とは大分趣を異にしてゐた。彼は天下の大勢にも通じ世の辛酸をも嘗め盡くしてゐた。彼の目には余の如き文學者は固よりの事剛三の如きすら恐らく小兒の如く映するのであらう。其抑へ難い内心の侮蔑は時々彼の言動に現はれ様としたが彼はいつも巧に其を韜晦するこ

とを忘れなかつた。而も此の洪さんと從二品の素淡との間に何等かの關係を見出すことは余の傳奇的の好奇心を満足さすに充分であつた。余はさつき剛三の打棄てて置いた繪葉書のアルバムを見る時も無く見つゝ私に二人の容子に注意してゐた。

アルバムを開けると劈頭第一に安重根の朦朧たる寫眞があつた。これは複寫に複寫を重ねたものが繪葉書に寫されてゐるのであつた。次には麻布の御用邸に在る王世子殿下の日本服を召した寫眞があつた。其次には鬚髯悉く白い伊藤公の寫眞があつた。其次には日本の子供の玩具を持つて遊んでゐる寫眞があつた。其次には素淡と同じやうな服装をした妓生の寫眞が五六枚もあつた。其次には赤坂萬龍の寫眞がこれも四五枚並べて挿んであつた。

繪葉書を見るのは其儘素淡の心を讀むやうな心持もした。劈頭に安重根の寫眞を見た時は彼女の穩かな顔のうちにも何處となく隠險な相が潜んでゐるやうに思はれたが日本の子供の寫眞を見た時は又た何國も同じ女の優しさを思ひ遣つた。見ると彼女は美しくしい顔に今は何の屈托も無いやうに極めて快活に打開けた容子をして洪さんと話してゐた。洪さんは余の方を振り返つて、

「素淡の素性を少し聞いて見ましたがお話し致しませうか。」と言つた。余はアルバムを下に置いて、

「其は面白さうですね。是非伺ひ度いものです。」と答へた。

「素淡は晋州の生れてございまして、十一の歳に妓生になり十五の歳に京城に出たさうでございます。宮中に入出入するやうにな

りましてからは殆ど毎日のやうに宴會がございました。ついで草臥れた爲めに階の蔭に隠れて居眠りをした事もある位で、其頃は面白くもありませんでしたが、辛い事も随分辛かつたさうでございます。と洪さんは歴史の話でもするやうな調子で話し出した。

一體妓生が宮中に入出入するやうになりましたのはごく晩近の事でございます。宮中に入出入す爲めには位階が無くちやならんところから、此素淡のやうに従二品などいふ位を貰ふことになつたのでございます。其から洪さんは余との話を中止して素淡に何か朝鮮語で言つた。素淡は立上つて、さつき洪さんの荒らした其處らよりも大分奥まつたところから紙にくるんだものを持出して來た。受取つて見ると其は三枚の辭令書のやうなものであつた。其一枚には斯うあつた。

今此

進宴教是時奉揮巾兼奉花差備女伶素淡從自願免賤帖文成給者

光武六年六月 日

宮内府圖

他の一枚は又斯うあつた。

勅命

醫女素淡爲通政階者

光武六年六月 日

今此

進宴時舉行醫女帖成給事奉勅
残りの一枚は斯うあつた。

勅命

醫女素淡爲嘉善階者

光武六年十二月 日

進宴舉行醫女帖加成給事奉勅

洪さんは朝鮮式の白文を讀んで聞かせた。前に洪さんの言つた通り女伶としては宮中に入るとが出来無いのて初めは宮中の宴會の時に拭掃除をしたり花を生けたりした其女伶素淡の職を免じ新たに醫者として取扱ひ昇殿を差許す其昇殿もだんたんに位を進めると言つたやうな意味のものであつた。

其から余が二三の質問に對して洪さんは通辯をしてくれた。其に對する素淡の答は斯うであつた。

「宮中に入つた時代は勿論の事其後でもお蔭様でまだひもじ

い目をする程生活に苦しんだ事はございません。けれども此お腹を悪くしてゐる事が今は何よりも苦しみてございます。この間も大漢病院に行つてお腹を割つて直して貰ひ度いと申しましたら下のお腹なら直してあげるが上のお腹は直らない。食物を氣を附けたらよからうと申されました。昔からまだ此人と思ふお方には出逢ひません。此方から思ふお方は向ふから厭と仰しやるし向ふから何とか仰しやつて下さるお方は此方から左程にも思はなかつたりして今に獨身で暮して居ります。どうか日本人のうちで心切なお方を見出して身を任せ度と思つてゐます。

剛三は依然として眠れるが如く動かなくなつた。彼は内地に在

る時も其一舉一動は悉く探偵によつて警察に報告されてゐた。彼が何度料理屋に行つて何時何回何十錢の支拂をし女中に幾らの祝儀をやつたといふ事迄一々記録に残されつゝあつた。朝鮮に渡つて來てからも固より當路者の注意に變りは無からう。彼が某月某日の夜内地から來た文學者と洪元善とを拉して朝鮮料理から朝鮮芝居を経廻り夜二更に及んで尙妓生素淡の家を出ずにあつたといふ事も進んでは其素淡の家にて彼は財布から幾らの紙幣を掴み出して蕎麥四人前とビール何本を購はしめたといふ事も明朝を出てずして報告される事は疑ひも無い事であらうが唯其素淡の宿に在つて赤い布團の上に仰臥して木枕に載せた頭の中で何を考慮しつゝあつたかといふ事は或は其報告に洩れるかも知れなかつた。

素淡は面前に余を置いて、日本人に身を任せ度いなどしらしらしい事を言つた時其顔にも洪さんの顔にも冷笑の閃きが認められた。けれども余は其冷笑の閃きによつて侮辱を感ずるよりも却て彼等二人の關係を揣摩し得る手がかりを得たやうに覺えて愉快であつた。寧ろ今少しかゝる動作の繼續せん事を希望したが、併し其は無益であつた。洪さんは例の注意深い目でちらと余の顔を見てすぐ其冷笑を悲惨な口許の皺の中に藏ひ込んでしまつた。其から又素淡の身の上話を切れくにした。其は親兄弟は尙晋州に在つて百姓をして居るといふ事や今は此京城に於ける妓生の副取締を命ぜられて居るといふやうな事であつた。「此方は春香傳のやうな小説をお作りになる方だから、お前の身の上話をして書いて戴くといふと申しましたら、素淡はどうかなる

べく善く書いて戴き度いと申しました。」と言つて洪さんは笑つた。

「春香傳位」のものは妓生でも讀むのですか。」

「讀むどころでは御座いませぬ。朝鮮假名の本もありますから其も讀ませうけれども第一「春香傳」ほど一般に行はれる芝居は無いのでございますから此素淡などは度々春香に扮した事もありません。さつき圓融社で御覽になつた妾などの中にも「春香傳」や「再生縁」や「紅蓮傳」などを繰り返し／＼讀んで泣いたり笑つたりして日を暮し夜になるとあゝいふ風に芝居に行くといふやうなものも澤山にあります。」

「日本の徳川時代の草双紙の類ですな。」

「さうでございます。尤もさういふ妾はまあたちのいゝ方の妾

て酒を飲んだり博奕を打つたり猥な話をしたりして日を暮すものゝ方が多いてございませう。」

「素淡などが人の妾になつたらどちらの方でせうかあの金成龍の弟の妾にでもなつたら。」

「洪さんは朝鮮語で何か素淡に言つた。素淡は少し顔を赤らめ乍ら何とか返辭をした。」

「金成植の妾になつたら。春香傳や貴方のお書きになつたやうなものや其他ためになるものを讀んで貞淑な婦人として……さうと思ひます。」と洪さんは自分がいふやうに直譯した。

「金成植といふのは金成龍の弟の事ですか。」

「左様でございます。」

「金成植の妾になつたらなど、平氣でいふ
ん奴てすな。」

「怪しからん奴てございます。」と洪さんは事もな

十七

余等が素淡の家を出たのは二時を過ぎてゐたらう。鐘路の通り
の巡査はランプの光りを余等の方に向けて怪しく目送したが
別に誰可はしなかつた。明るい月はだんく西に傾いたけれど
もいつ迄も雲のかゝるといふやうな事は無かつた。京城の天地
にいかにか陰謀が行はれつゝあつた時でも大空の月は常に斯くの
如く清明であつたらうと思はれた。

剛三はもう歸らうと余が促した時倒れ木を起こしたやうに立
上つた。素淡と別れる時も彼は大きな手を差延べて握手した許
りて門を出てから此處に来る迄も其沈黙を續けてゐた。余も別
に無用の事を話し掛けもしなかつた。

洪さんはとある町角に来て立止つた。さうして、

「貴方がたはもうお歸りてございますか。」と剛三と余との顔を
見、それでは私は此處でお別れに致しませう。」と丁寧に辭儀をし
て横町に這入つた。彼は初めて通譯めいた幫間めいた不愉快な
役目を免れ得たのを快とするやうに姿勢を正して横町の月に歩
み去つた。其後影を目送した時余は多年志士を以て任じ來つた
彼が今日の心情を悲しまねばならなかつた。
暫くしてから剛三は大人が小兒に對するやうな口吻で余を振

返つて言つた。

「今夜は何か面白い事があつたか。材料になりさうか。」

余は取り敢へず、

「珍らしくつて面白かつた。」と答へざるを得なかつた。

「さうか。あんな事が材料になるのなら今度は又他の事を見せ
てやらう。」と何處迄も大人の態度を保持して悠々として先に立つ
て歩いた。最前文學者と一緒に歩くのはもう懲りくした。と
言つたり、今日は文學者を案内して遣る積りであつたのが到頭文
學者に引ずり廻される事になつた。」と云つたりした事は忘れた
やうな顔をしてゐた。

南山樓はまだ門を開けて余等を待つてゐた。お京は眠むさう
な顔をして出迎へた。さうして、

「貴方石橋さんのやうな悪友と一緒に出歩いてはいけませんよ。」
と人をたしなめるやうに言つた。

「悪友なんて生意氣な言葉を知つてやあがる。」と剛三は笑ひ乍
ら自分の二階の部屋に上つた。余も自分の部屋に戻つて着物を
着替へてゐるとお京はぶつ／＼口小言を言ひ乍ら這入つて來た。

「これから又一杯遣るんですつて。本當に底抜けねえ。貴方に
もいらしつやいといふのですけれど、もうお休みになつたと言つ
て置きませうね。」と一人て合點して歸つて行つた。

いつも相當に賑かな南山樓も流石にひっそりと寢静まつてゐ
た。南山樓に歸つて更に徳利を何本倒したといふ事迄當路者の
問題になる剛三の境遇を滑稽なやうにも氣の毒なやうにも思つ
た。

床にもぐり込まうとしてふと見ると今日出る前に筆を加へた彼の慶之助の原稿が机の上に置かれてあつた。

十八

翌朝は草臥れて朝寝をした。一度眼は覺めたのであるがぼんやりと昨夜の事を考へ乍ら又寝た。うとくし乍らも非常に身體の倦怠を感じて現と夢との境に苦痛を覺えるやうな状態が續いた。愈愈はつきりと眼が覺めたのはもう十時が近かつたらう。金成龍の宅に泊つた妻はまだ歸らず八疊の座敷の中央には余一人が寝てゐるのであつた。日は南の障子に當つてゐてうだつたやうな體を動かすのも乙構に覺えた。頭を枕に載せたまゝ回

轉さすと目に入るものは無落款の書と古びた馬の繪と床の間の隅に置かれた彼の腰物の高麗焼とであつた。尙枕許の机の上には寝た儘では目に入らぬが彼の原稿の置かれてある事も意識された。

昨夜は日暮前から夜の二時迄も彷徨き廻つて、一時は眠い事も草臥れる事も忘れて唯燈火を追ひ歡樂を追つた青年の昔に返つたやうな心持もしたのであつたが其酔の全く醒めた今朝の心持は不愉快であつた。床の隅に置いた儘暫く忘れてゐた彼の腰物の高麗焼が此朝は頗る痛快な意味で他の眼に映ずるのものをかしかつた。其處へ東京が這入つて來て、

「あやもう御眼覺。もつとゆつくりとお寝みになればいいに。」石橋さんが一杯遣つてゐるから貴方もお眼覺になつたら入らつ

しやいッて。」と言ひすて、もう手早く布團を片附けはじめた。漸く顔を洗つて机の前に座ると、机の上の原稿が意地悪く目に映つて氣色が悪い。余は剛三の部屋に行く事にした。

廊下で逢つたお京は、
「おや行らつしやるの。貴方は薄志弱行ね。奥さんがお留守になるとすぐ石橋さんに同化されてしまふのね。」と大きな聲で言つた。

剛三はチリの劍を控へて小娘上りの女中に酌をさせ乍ら天下の大事を所理するが如き堂々たる態度で朝酒を飲んでゐた。小娘は驚の前の鳩のやうに恐れ入つてお給仕をしてゐた。

朝から遣つてゐるね。」と聲を掛けると、
「マア座るが、い。」と顎て其邊を指した。小娘は俄に援兵を得

たやうな眼附をして余の顔を見上げた。

今朝は頭が痛くて氣持が悪い。」と余は獨りて顔を洗つると剛

三は其には答へず、首さうにチリの豆腐を口に持つて行つた。

昨夜の事などは最早忘れてしまつてゐるらしく唯チリの味のみ

が今の彼の心を支配してゐるやうに見えた。

お京は余の膳を其處に運んで來た。さうして小娘に代つて酌

をした。

石橋さん貴方今日演説をするんですつてね。」

うん。」

「およしなきいよ。貴方本當に演説は下手だわ。」

「失敬な事をいふ。貴様等に上手下手が判るか。」

「判るわ本當に見苦しいおよしなきいよ。」

剛三は苦笑した。流石にお京の前に据ゑると剛三の堂々の陣
が稍々ともすると亂れやうとした。其處へ這入つて來たのはお
筆であつた。

この間余は或僧に逢つて斯んな話を聞いた。自分が此京城に
寺を開いてから取扱つた葬式は大概中年者である。小兒は時々
ある。老人は殆ど絶無と言つてもよい。初めは不思議に思つたが
よく事情を驗べて見ると其も其皆で第一老人は殆ど此地に居な
い。此地に渡つて來て仕事をせうといふものは血氣盛な若いも
の許りである。従つて死ぬるのも其中年者に限られてゐる。さ
うして之に關聯して悲惨な事は男に限らず女に限らず一人ても
死んだものもある店は大概翌日から其機關の運轉を中止せねば

ならぬ程切迫した状態の下に在る。いはゞ男も女も精一杯以上
の力を出して十二分の働をしてゐるのであるから夫なり妻なり
一人を無くした其店は忽ち器械を動かすことが出來なくなるの
である。これは内地などで想像することの出來ぬ殖民地の一特
色である。前にも言つたやうに此地に渡つて來て仕事をして
ゐるものは大概一度は内地で失敗したものである。また家庭を
作つた許りといふやうな若夫婦よりは所謂中年の夫婦者が多い
のも其爲めてあらう。さうして親戚も友人も内地に在る許りて
彼等夫婦ものは其單純な家庭を提げて最後の奮闘を試みに此殖
民地に渡つて來たのであるから孰れか其一人を亡くして忽ち機
關の活動を中止せねばならぬのも止むを得ぬ次第である。けれ
ども斯く一方に内地の都會の民以上に必迫した生活を試むるも

のがあるかと思ふと他方には又たく無爲徒食の遊民が大手を振つて大道をのさばり歩いてゐるのも亦た殖民地の一特色である。單に口を嵌めて何事も言はぬ其報酬として或一大會社から數百圓の手當を支給されつゝある所謂豪傑なるものがある。剛三の如きも如何なる處から其旅費を得て何を成す爲に永らく滞在してゐるかは大いなる疑問であるが兎に角京城の天地は彼を容れて知らん顔である。彼のお筆の如きも矢張り其社會の罅隙に生存してゐる船虫のやうな態度で何の憚るところも無く南山樓に出没してゐるのであつた。

「お筆さん今お歸りなの。」とお京は意味ありげにお筆を見上げた。

「はあ唯今。」とこれも意味ありげなる眼をお京に酬いてばかり

と剛三の傍に坐つた。

「兄さん昨晚大變遅かつたんですつてね。何處を彷徨いてらし

つたの。」

「何處を彷徨いてゐやうと入らんお世話だ。」と言つて剛三は笑

つた。

「お盃頂戴な。」とお筆は剛三の手から奪ひ取るやうにして盃を

取つて姉さん注いで頂戴。

お京は黙つて注いだのをお筆はすく美しくしい口に持つて行つ

て半分許り飲みほした。

「兄さん私今日酔ふは。」

「勝手にするがいい。貴様が酔はふが酔ふまいが己の知つた事

ぢやない。」と言つて剛三は又笑つた。剛三の顔は漸く舟めやう

に赤く染まつても筆の青白い顔との對照が目立つて見えた。筆は其れから盃に盃を重ねた。其から三味線が持出されて初めは筆が弾いて歌つた。終には京が覺束ない手つきで弾くのを筆は口三味線て訂正し乍ら踊つたりした。泉屋で三福や京城藝者の落語や踊に剛三も余も腹の皮をよつた時笑はなかつたのは洪さんとお筆とであつたが流石にお筆の腕はたしかであつた。これだけの腕を持つてゐるお筆が彼の下劣な落語や踊に笑ふ事が出来なかつたのは道理あることであつた。さうして何故に彼女は今朝に限つて斯んなにはしやぐのか其理由は判らなかつたが此醉態のうちに却て彼女の淋しい一面を隠くすことが出来なかつた。

十九

お筆の醉態は計らずも一座の興を呼んで剛三も余も暫くは笑ひ興じたが朝からの三味や踊は何となく淺間しく間も無く其興も衰へて余は自分の座敷に歸つた。

金成龍の宅から電話がかゝつて来て今二三日是非奥さんをお泊め申すことにし度いから許して呉れと言つて來た。余は無造作に承諾を與へ疊の上に横になり乍ら又考へるとも無く昨夜の事を考へて見た。

あの事は遂に尋ても見なかつたが彼の素淡の門から出た多勢の朝鮮人はあれは何であつたのだらう。あのうちに例の金成龍

の弟の金成植といふ男もゐたのかも知れぬ。函融社に行つた時
も朝鮮人は余等二人の日本人に席を譲り素淡の家でも折角先に
遊びに来てゐた彼等は余等の爲めに去つたのであつた。余は其
に對して決して勝利を誇らうといふやうな念慮を起すことが
出来なかつた。寧ろ人の花開は足を踏入れたやうな心持で無用
な行爲であつた事を後悔した。彼等朝鮮人は彼等朝鮮人として
各々愉快な自己の天地を作らしめよ。日本人が横合より其中に
足を踏入れる事は何となく不愉快なことにも考へられた。素淡
と洪さんが余に通じ無い朝鮮語で頻りに何かを語り合つてゐる處
に余は多少の侮蔑を感じ乍らも抑へ難い同情をも惹起するのであ
つた。

余は斯る事を考へ乍らうとくしてゐるうちに遂に晝寝をし

てしまつた。夜の更けた朝は幾ら朝寝をしても多少の頭痛を覺
えて気分も不愉快であるのが常であるがいつも其は晝寝により



て恢復された。目の覺めたのは
もう日が西に落ちて涼し過ぎる
と思はるゝ風の簾を吹いてゐる
頃であつた。頭は生れ變つたや
うに軽くなつて気分も頗る壯快
であつた。此頃修繕した美しくし
い南山樓の湯槽の中で余は天下
に余より幸福な人は無いやうな
心持で手足を延ばした。唯余は
斯る一人として斯く現世に存在

してゐると意識する外何の念慮も無かつた。其時

「一寸憚り様其處に指環は無くつて。」と戸の透きから顔を出したのはお筆であつた。見ると流しに俯向けてある桶の上にまぶしく輝いてゐる寶石入の金の指環があつた。

「これだらう。」と余は取上げて見ると何金といふのであらうか、持重りのする純金の指環であつた。

余は湯を上つてからも静平な心持は暫く續いた。さうして私に慶之助の來る事を待設けてゐたが音沙汰も無く、又剛三もお筆もあれからどうしたか問として聞くところが無かつた。お京も今日は休み番だとかで今朝の三味線以來姿を見せなかつた。晩飯の時になつて小娘の女中の話すところによると今日は何處か

に政談演説がある筈で剛三も其に出る事になつてゐたのが、其筋から禁止されたとかで余の晝寝をしてゐる間に剛三は他の浪人組二三人の來訪を受けて一緒に何處かへ出て行つたといふ事であつた。

余は此夜は何となく寂寥を覺えた。昔下宿生活をしてゐた頃一夜寄席に行くとき翌晩塾居することに耐えられぬ淋しさを感じたが其程では無くとも晩夜の紅燈綠酒に比して何となく寂寥を覺えるのであつた。十時を過ぎた頃から夜涼を追うて余は泥岨——本町通りを朝鮮人は斯く呼ぶ——を散歩した。もう人通りは出盛りを過ぎてゐた。兩側の店をも覗き飽いて余はふと彼の慶之助の一座が遺てゐる明治座を立見して見やうと思ひ立た。

明治座は狭い小屋であつた。流石に電燈が明るく灯つてゐるので見物席の人の顔は一々吟味することが出来た。余は這入口に突立つてゐるとすぐ其處の棧敷から余を小手招きするものがあつた。見るとお筆とお京とであつた。余は此二人の席に割込むとを躊躇して後ろの方に小さくなつて坐つた。舞臺では何かいふ一番目はもう済んで喜劇隣り同志とかいふものが始まつてゐるらしかつた。詳しくは判らないが目の縁を薄く隈取た着物をつんつるてんに着た女中が一人で喝采を博してゐるところがどうしても喜劇の舞臺面であつた。余は少しもをかじみを感じ



えず寧ろ其くすぐりを不愉快に覺えたが座中の多くのものは聲を出して笑つてゐた。お筆もお京も言合はしたやうにハンケチを口に當て、體を前後に動かして笑つてゐた。今茶屋の女中が煙草盆と一緒に持つて來た番附を見ると其は昨日慶之助が袂から出して置いて行つたあの番附と同じもので唯外題と役名とが違つてゐた。鶴見慶之助といふ二號活字の上に在る役名を見る

と妹春野と並べて女中お玉とあつた。よもやと思つて他を驗べ
て見たがもう其他に女中らしいものは無かつた。さうすると今
舞臺で俗悪な當込みをして喝采を博しつつあるのがあの慶之助
に相違無かつた。余は頗る意外の感に打たれて暫く茫然として
其女中の動作を見てゐた。成程よく見て居ると其は慶之助に相
違無かつた。

一篇の脚色は隣り合つてゐる家の主人公が互に藝者狂ひをし、
其細君達も共に嫉妬を焼いてゐるのを此の慶之助の扮してゐる
女中お玉が兩方の細君に入智恵をして一方の細君は臆病人にな
り一方の細君は臆氣狂になり互に亭主を弱らせるといふ極めて
幼稚なものであつたが殖民地の男女は此脚色に酔はされて前後
を忘れて笑ひ興じてゐた。

廻り舞臺の時に庭に置いてあつた一つのテーブルを取除ける
のを忘れた爲其テーブルは舞臺と共に上手から正面の方に引擦
られて来て遂に土間に顛覆した。其テーブルの上には一つの筒
形の陶器の火鉢が載つかつて居たので其も灰煙をあげて顛覆し
た。同時に土間ではワツと子供の泣き聲が上つた。座中の人は
皆立上つて其方向を見遣つた。テーブルは足を空様にして墜落
してゐたが幸其邊には人が少なく子供が泣いたのもたいした怪
我は無いらしかつた。座中の人は皆怪我の無かつた事を祝し合
つて別に道具方を咎める聲は聞えなかつた。さうしてすぐ熱心
に回轉された新しい舞臺面を眺めた。
前幕の女中が二人の細君に方策を授けるところは未來の葛藤
が豫想されて多少の興味もあつたが後半の二人の亭主が家へ歸

つて来て二人の細君の狂態に手古擦るところは豫想程の事が無くつて殊に面白くなかつた。其舞臺の役者はつとめてをかしがらせやうとして様々の當込みをやつた。慶之助の下女は陰に隠れてゐ乍ら時々姿を現はして不思議な恰好をして見物人を笑はせてゐた。

其が濟んだのが十一時半頃でもあつたらうか。余はもうこれで終つたことと思つて歸り仕度をしてゐると、まだ時間があるから更に二幕の喜劇を差加へて御覽に入れると、一人の役者が舞臺着のまゝ幕外に出て口上を言つた。座中の人は皆喝采した。朝鮮人は夜更かしをして朝寝をすると聞いたが此地にゐる日本人も十一時半になつてまだ二幕の喜劇を差加へられて喝采する程夜更かしに馴れてゐると見えた。是等も星野の所謂日本人の朝

鮮化する一現象かとかかしく思はれた。

余はもう此芝居に飽いて表に出た。お筆やお京はまだなかなか腰を上げさうには見えなかつた。

二十一

明治座を出てからもまだ宿に歸る心持にはなれなかつた。日暮近くまで午睡を食つたので眠く無い爲めか昨夜の清興を再び追ひ度いやうな心持に支配されてか余は尙とぼくと往來を歩いた。月は曇るといふ事を知らぬやうに此夜も亦清光を放つてゐた。本町通りも大方はもう店をしまつて燈火を滅した爲めに月是我物顔に光を増して戸の透き小溝の中迄を明るく照らして

ゐた。余は本町通りを横ぎつて狭い川沿町を北へ歩いた。其處も日本人の店は大方寢静まつてゐた。唯チゲが二三人門前に立つて何を當てといふ事もなくぼんやりと往來を眺めてゐるのもあつた。彼等は即て此大道に其チゲを下ろして地上に一夜を明かすのであらう。朝鮮人の店は例の夜更かしをする彼等の習慣でまだ起きてゐるのも少なくなかつた。さうして彼等は狭い家の中は寢苦しい爲めに門前に簾を敷いて其の上に夜露を浴び乍ら寢るものも多いと聞いた。其に就いて或人は斯ういふ事を言つてゐた。斯く大地の上に横臥して平氣なのは三代の修業を要する。といふのは我等日本人は固よりの事朝鮮人でも父祖からして斯る經驗の無いものが遣つたならば必ず病氣になるが祖父と斯る經驗を積んで來た其三代目の子はよくこれに堪

へ得るに至ると。

斯る事を思ひ出しつゝ余は明るい川沿町を愈々北へくと歩きつゝあつた時ふと後ろに人聲のするのを聞いた。これは慥に日本人の聲で而も女の聲であつた。其が甲高い聲ではあるが何處か世間を忍ぶらしく極めて簡單に而も其甲高い調子を力めて仰へたやうな所があつた。さうして其はたしかに、

「兄さん。」と聞えた。

余は覺えず振り返つて其方を見た。さうして道傍にぼんやり突立つてゐる朝鮮人の影と離れて川に沿ふた方を此方に歩いて來る女らしい一人の影を認めめた。

「兄さん。一寸待つて頂戴な。」と再び前と同じく調子を抑へた聲が聞えた。余は何とも考がつかなくつたが日本人で此邊にゐ

るものは前後を振返つて見て余一人ほか無かつたので余は其儘立留つて其人影の近づくのを待つてゐた。

だん／＼近づくに従つて萬一と思つた事が事實となつて現はれた。其はち筆であつた。彼は白粉を塗つた白い顔を月の光りに曝しつゝ微笑を含んで近よつて來た。さうして、

「随分早い足ね。」と息を切らして言つた。余は兄さん。といふ言葉を聞いた時何處か近頃耳馴れた言葉のやうに思つたのは今朝も筆が度々剛三に向つて發した言葉であつたが爲めであることを此時漸く合點した。さうして今迄は唯何事とも分かず佇んでゐたのであつたが其が愈々ち筆と判つてからは却て深い疑惑の雲に包まれざるを得なかつた。

「何か私に用事ですか。」と余は言葉を改めて聞いた。

一寸御相談し度い事があるの。あゝ苦しかつた。兄さんが歸りなすつたことを後から知つたものだから急いで追附かうと思つて表に出て見るともう一町も前を歩いてらつしやるんでせう。其から急いで後を追つたんだけれど憎らしいやうに兄さんの足が早いんだもの。」と言つて彼は又苦しうに息を繼いで、

「あとから鶴見さんも來るのですから一寸其家迄交際して頂戴な。」と彼はもう余と肩を並べて歩き出した。余はどうしたものかと思ひ感ふたがあとから慶之助が來るといふ事で略事情を諒解する事が出來た。さうして流石に夜更けて美人と歩く事を心が答めて前後を見廻したが道傍の朝鮮人は別に他を怪むやうな風も見せず唯ぼんやりと突立つてゐた。

ち筆はとある軒ラムブの出でゐる寢靜まつた家の前に立止つ

て表の戸を叩き、

「一寸開けて頂戴な。筆です。」と呼んだ。寢ぼけたやうな女の聲がうちから聞えて樞を開ける音がした。

「どうも済みません。」とお筆は言つた。余は四五歩後ろに引下つて素淡の艶容と又別種の趣のあるお筆の後ろ影を見てゐた。

表の潜り戸を開けた女は左手に手燭を持つてゐた。戸を開ける迄は此手燭の光が如何に戸内の暗を照らして明るかつたかは想像の外であるが、今表の月光になれた目で其手燭を見ると其は唯小さい黄色い火の固りに過ぎなかつた。女は其火の固りを手に持つて月光の及ばぬ戸の内に佇み乍ら、

「お筆さんだつか。さあ這入つとお呉れやす。」と大阪言葉で言

つた。其がいかにも眠むさうな聲であつた。お筆は無言に身を引いて先づ余に這入る事を勧めた。余は此際最早躊躇する餘裕を見出さず其四角な黒い戸内の闇に身を入れた。續いてお筆も

這入つて樞は再び下ろされた。

「あとから鶴見さんが來ます

からね。御面倒ですが……と

お筆は其女を顧みだ。

「さうだつか。」と女は尙鼻のつまつたやうな眠むさうな聲で返辭をして掛けやうとした。掛金を見合はせた。さうして手燭を持つて先に立つた。手



燭が狭い廊下を進むに連れて其光りはだん／＼余の眼に馴れて黄色い固りと見えたのが溶けて動く燭と化した。一體が日本式の建築で廊下の片側には古びた障子が立ち並んでゐたが其突當りの部屋は洋館風の應接室のやうな所であつた。女は其部屋に余等を導いて、

「一寸此處に待つて、おくれやす。」と其手燭を圓い卓の上に置いて立去つた。此時よく女の容子を見ると太つた腰に細帯を一つ締めてゐる許りの五十過ぎの醜い女であつた。

「濟みませんがね、水菓子にビールを。」とお筆は主ぶつて命じ余と卓を隔て、疎末な籐の椅子に腰を掛けた。二人は暫くの間黙つて蠟燭の火を見てゐた。其沈黙の間は餘り長く續いたとは思はなかつたが、其間に余が頭には種々の考が走馬燈の如く過ぎ去

つた。第一此家は何だらうと考へた。一體の容子は待合らしくもあるが其にしては餘に殺風景であつた。眠むさうに鼻をつまらせてゐる細帯姿の女は見るからに不愉快であつた。お筆の嬌態も今朝剛三の部屋で浮れ踊つた時は淺間しいうちに濃艶なところもあり淋しい處もあつて流石に人の心を牽くやうに覺えたが此の不思議な家に余を拉して計り知られぬ料をする彼女に對しては余は寧ろ深い疑惑を抱いて多少憎悪の念さへ起した。さきには慶之助があとから來るらしく言つたが其さへ今は當にならぬやうな心持がして蠟燭の火の照らす限りの此場の光景が凡て伏魔殿の如く余の眼に映つた。「貴方は薄志弱行ねえ。」と言つたお京の言葉が思ひ出された。余は何故にかゝる女と不用意に此家の戸をくゞつたのか。お筆と剛三との關係はたとへ噂の如

く淡泊なものとしても友人甲斐も無い男と言はれて辯護の餘地が無いでは無いか。

「此間お筆も亦沈黙を續けてゐた。けれども其間彼女は何を考へつゝあつたらう。彼の眼は悲を表はしてゐるやうにも見えず、さりとして又別に喜に輝いてゐるやうにも見えなかつた。いはゞ斯る事を家常茶飯と心得てゐるらしく其長い睫の奥に大きな瞳は静まり返つてゐた。やがて、

「何だか立籠つてゐて厭に暑いね。」と其邊を見廻はしたが別に立つて其窓を開けるでも無かつた。

「ねえ兄さん實はねえ。兄さんなんか言つては濟まないのですけれど石橋さんを兄さんと言つてるものだから矢張り……。」と言ひ掛けて其大きな眼に俄に媚を含ませて余の顔を見た。手燭

の灯は瞬くやうに動いた。

「そんなことはどうでもいいが全體どういふ相談なの。」

「さう改まつては話しくいぢやありませんか。まあ其内ゆつくり話すわ。ぢやあ兄さんと言つてもいいのね。嬉しいわ。」と言つて余の吸ひ掛けてゐる煙草を取つて其儘自分の口に持つて行つた。

女はアサヒビールに二つのコップを添へて持つて來た。さうして生憎水菓子は切れて無いと言つて安つばい菓子を一皿一杯持つて來た。

「随分不景氣ねえ。」とお筆は嘆息するやうに言つて直ちにビールを注いで余にも勧め自分でも飲んだ。

「本統になあ氣の利かん事つて。」と女は相變らず眠むさうな聲

をしてゐた。さうして漸くラムプを持つて来たが其も不景氣に曇つてゐたので、

「そんなラムプより此手燭の方が風情があつていいわ。ねえ兄さん。」とお筆は言つて替で心を切つた。蠟燭の火は俄に明るくなつて誇り顔に大きく揺れた。女はラムプを持つた儘退却した。

粗末な菓子を口に入れるとポロ／＼と舌の上で崩れた。其あとに飲むビールは唯だ不味い苦い液體であつた。けれどもせうこと無しに余はガブ／＼と飲んだ。お筆も余に酌をしては自分のコップに注いだ。其コップも半以上空になつてゐる事が多かつた。女は二三本の蠟燭とビールの代りとを持つて来た。「慶之助も来るか来無いか判らないだらう。それにもう大分遅



くなつたやうだから歸らうぢやないか。」と言つて余は欠びをして見せた。お筆は女持の時計を出して見て、

「まだ一時にならないわ。どうしてもあとの喜劇が済むのが一時半位になるでせう。今日兄さん大變よく晝寝をなすつたといふぢやないの。そんなに眠いわけは無いわ。」と承知しない。

「だつて眠いのですから仕方が無

す。」

「私も昨夜夜更かしをしたから晝寝をして起きて見るとまだ兄さんは寝てらつしやるといふんでせう濟まないと思つたけれど

お先へ風呂に這入つたの。さうさう。」と思ひ出したやうに、

「此指環を兄さんに取つて貰つたわね。」と力て嬌笑を装うて他

を見た。かゝる時蠟燭の光は晝間見た時よりもより多く若く彼女

女を見せるのであつた。此古狸が最前から頻りに少女らしく取

做して痴態を演ずるのを余は腹立たしく思ひ乍らも尙ほ流石に

其艶容に目を留むる事が多かつた。

「昨夜は何處で夜更かしをしたの。」

「矢張り此家で。」

誰と。

お筆は笑つて答へ無かつた。けれども其が慶之助であること

は疑も無い事のやうに思はれた。さうして余は唯二人の嬉曳の

いゝ玩弄物に使はれてゐるのかと氣が附くと俄に腹立たしく抑

へ難い多少の嫉妬をも感じた。

「いつの間にか酔うてゐた。余は立つて便所に行かうとした時

お筆は、
便所？。ちや御案内するわ。」と言つて手燭を取つて先に立つ

た。
お筆が一枚の戸を開けると驚いた。締出されてゐた月光は忽ち

お筆は其手燭を廊下に置いて、余の後ろを通つて自分も亦便所に這入つた。やがて冷たい月の光を浴びて、手洗ひの水に手を洗つた。余の心は落着いてゐた。一枚のガラス障子を開けて外面を見ると、空は玲瓏として一抹の曇りも無く、天涯の果の果迄も見透すことが出来た。此間或内地の旅行者に逢つた時、彼は此澄み渡つた朝鮮の空を眺めて、

「どうです此美しい空は、此空を見棄て、何て内地へ歸る必要がありませう。」と彼は肺腑より出るやうな聲で斯う言つた。此人は實業家であつて、嘗て社會の寵兒であつたのが、ふとした事から今は日蔭の身に成て、頗る不遇の地にあつた。彼が内地の空を憎み、此の朝鮮の空を熱愛する心持の奥には、淋しい響があつた。此時余はふと此人の言葉を思ひ出し、其は遠い他人の言葉で無い

やうな心持がしつづく、と其透明の空を見入つた。何處で吹く笛であらう、時々吹き込む風に連れて、斷續として淋しい音を傳來つた。朝鮮人が往來に腰を据ゑて、笛を吹いてゐるのはよく見る光景であつた。無器用に作つた粗末な笛も、悠容として、追らぬ路傍の人によつて吹奏されてゐるのを見ると、余はいつも心を牽かれて顧るのであつたが、此笛の音にも覺えず、耳を時て、暫く我を忘れて佇んだ。お筆はいつの間にかもう便所を出て、手洗水に手を濯ぎ、ハンケチを口に啣えて、鬢の後れ毛を掻き上げつゝあつた。さうして廊下には手燭の灯が殆ど光を失つたやうに再び元の黄色い一固りの火となつて、淋しく余等を待受けてゐた。

かゝる間に、月の影も蠟燭の光もお筆の心の上には何の影響を

も與ふる事無く、彼は終始余に媚を呈して他の心を牽かうと力めてゐるらしく見えた。彼はいつ迄も余の傍に立つて鏡に向つて彼の容姿を繕うてゐた。初め蠟燭の火影に見た時彼の大きな瞳は長い睫の奥に古い沼の如く静まり返つてゐると思つたのは東の間で其後彼の絶えず試むる表情は常に酔はんとして酔ふことの出来ぬを悲むてゐる余をして知らず識らず心を傾けしむる程の力を持つてゐたが、今月光を浴びて尙ほ耻ぢ無き彼の媚態を見た時已に醒めてゐた余の心は唯其を憎み憐むに過ぎなかつた。「ねえ、何をぼんやり立つてらつしやるの。行きませうよ。」と彼女は遂に堪へ切れずなつて余を促した。余は別に其を拒まうともしなかつた。彼女は余が開け棄てた障子を自分で締めて先に立つて手燭を取つた。戸が締められると廊下は又もとの闇にな

つて手燭の光は覺束なく余等を導いた。應接室に戻つて見ると例の粗末な菓子を盛つた皿と二本のビール瓶と二つのコップとが空しく卓上に人待顔である許りて慶之助はまだ音沙汰も無かつた。余はもう此圓卓を隔て、彼女と對する變化の無い状態に飽いた。飯み残したビールを再び口にする勇氣も無かつた。如何にして新たに局面を展開すべきかは直に余の心を見て取つたお筆の少からず苦心するところであつたらしい。其處へ例の鼻の詰まつた女が顔を出して、「今お使が此お手紙を持って來ました。」と相變らず眠むさうな聲を出して一本の手紙をお筆に渡して引下つた。お筆は、「おや鶴見さんからだわ。」と其を披いて見た。さうして一讀し

たあとの敷を余に渡した。見ると成程例の原稿の文字と同じ慶之助の手で、

「今夜陽同志を演了致候上此病院に参り申候。兼て御話申上候事有之候春尾緑水は遂に危篤に迫り申候。今夜参るやう申上置乍ら右の次第にて御違約申候。不悪御思召被下度候。敬具」

大漢病院にて

夜二時

慶之助

お筆様

とあつた。お筆は慶之助の來ないといふ事を最前からあまり氣にしてゐるやうに見えなかつた。此手紙を見た時も格別の表情を其顔に認める事は出来なかつた。唯此手紙によつて局面を展開し得たことを寧ろ満足してゐるかのやうに見えた。

「春尾緑水とかいふのは矢張り役者なのかね。」

「何でもあの一座の立女形だとかで鶴見さんは始終同じ部屋にゐて大變世話になつた人だとか言つてました。さうく斯んな話を鶴見さんがしてゐましたわ。」と言ひかけて一寸躊躇し、

「もう其春尾といふ役者は死んだのでせうか。」と余の顔を見た。

「まだ此手紙の模様では死んだとは無いがもう斯う話してゐるうちに死んだかも知れない。」

「いやだわねえ。」とお筆は椅子を急に余の傍に寄せて四周を見廻した。

「どんな話を鶴見がしたの。」

「鶴見さんは作者の方が本職なので鏡などは持つてゐないので、其の春尾といふ人の置いて行つた鏡を其儘使つてゐるのですつ

て。さうして其春尾といふ人の役は大概鶴見さんが引受けて遣
るものだから顔を作りながらも気がさして夜淋しい時な
どは何だか鏡に映つてゐる自分の顔が其春尾といふ人らしく見
えて仕方が無いんですつて。」と彼女は更に余の傍に身を寄せた。
余が蠟涙の屑を焔の中に落とすと、ヂッと音を出して消えるかと
思ふやうに暗くなつたのが忽ちぱつと明るくなつた。お筆は
「厭よ。そんな事をしては。」と其聲は稍震へて、しかと余の手を
握つてゐた。此時不思議にも向ふの薄暗い壁の面に役者の顔が
と思はるゝやうな病人らしい顔が余の眼に映つた。余は愕然と
して息を殺して暫く其を凝視したが間もなく其は全くの幻影に
過ぎなかつたことを明にした。

「慶之助が来無いと極れば歸らうぢやないか。」と俄に頭の疲勞

してゐる事を自覺した余は最早何事を考へるのも懶く唯もう今
夜の舞臺を此儘に終局にすることを何より望ましい事に思つた。
「さう。ぢや車をさういふわ。」と彼女は強て其を拒まうとはし
なかつた。さうして、

「本當に御迷惑でしたわね。けれども私大變面白かつたわ。」と
言つた。初め余に相談があると言つた其相談は遂に彼女の口か
ら出ずに終つた。出ずに終つた許りか、其事は頓と忘れたやうな
顔をして澄ましてゐた。余も強て其を聞かうとは思はなかつた。
やがてお筆の命じた車は一臺ほか来なかつた。お筆はどうす
るのであらうかと疑つたが併し其はどうでもよかつた。余は唯
お筆の手から開放される事を此際何より嬉しく思つた。表の月
は益々冴えてゐて秋のやうな涼しさは人の肌に浸みた。

昨夜は狐につまゝれたやうな心持であつたが今朝になつて考へて見ると格別なことでも無かつた。」と余は其翌朝重たい頭を抱き乍ら布団の中で考へた。

斯の如く放縦な女は別に世間に珍らしい事も無いのであつた。試に余が彼女の術中に落ちてあれ以上に事件が發展したとすればどうであつたらう、余に取つては大事件であるが彼女に在つては餘りに平凡なことであつたかも知れなかつた。其にしても疑問なのは剛三と彼女との關係であつた。たとへ放任して置にしても自由に外泊を許すに至つては餘りに甚だしいと言はねばな

らぬ。剛三は果たして彼女の斯る大膽な行動を知つてゐて制せぬのであらうか又一切知らずにゐるのであらうか。余は其を剛三に問ひ質したのか其とも知らぬ風をして打棄置くべきものか。と余は其處に重大な責任が生じた如く感じて一種の苦痛を覺えるのであつた。其處に這入つて來たのは例のお京であつた。さうして、

「貴方も随分多情多恨ねえ。奥さんがお歸りになつたら大變だわ。」と笑ひ乍ら脱ぎ棄てた儘になつてゐる昨夜の着物を疊み掛けた。

「お前はあれからどうしたのだ。お筆許りが先に出たのか、お前も一緒に出たのか。」

「私はあとの喜劇を一幕だけ見て歸りました。鶴見が出なくつ

て面白くなかつたわ。

「皆大變鶴見が最負なのね。」

「不思議なものですわねえ。貴方ところへ来た時に逢つてから皆自然最負になつたのですわ。」

「其前から大分御最負らしかつたぢやないか。あの役者が何處がいゝのだらう。」

「役者らしくなくつて初心な處がいゝんですつて。其はお筆さんの話ですが私は唯舞臺で見たゞけて外の役者より厭味がなくつて好きですわ。」

「あれで厭味が無いのかな。驚いたものだ。」

「唯芝居を見て歸るだけがどうしたといふんです。貴方こそ驚いたものだわ。其に石橋さんにも悪いぢやありませんか。」とお

京は眼を光らせて再び冷笑を洩らした。

其處で余はお京に一部始終を話して、

「今言つたやうな譯だから全く罪は無いんだよ。」と言つた。お

京は初めの間は戯談のやうにして聞いてゐたが終には流石に余のいふ事が偽で無いのを合點したらしく、

「本當にお筆さんも困つたものね。あの深川といふ持合はお筆さんが三唄さんのお妾さんの頃からよく出遣入りしたうちです

の。三唄さんも初めは喧しくも言つたやうですけれど後には知つて知らぬ風をしてゐたやうです。石橋さんもよく其を知つて

あるから初めから全く放任かしなの。其に石橋さんは全く色氣抜きてたゞどうかしてやらう位に考へてゐるのでせう。けれど

も石橋さんがどうかして遣る前に吃度お筆さん自身の方でどう

かなるわ。其や屹度よ見てゐて御覽なさい。」と笑つた。

「三嘴といふ男はどういふ用事で満洲へ行つたのかね。」

「いろく噂もありますけれど、大分借銭もあつたらしいですか。實際どういふ用事で行つたのですか。兎に角満洲に行つたのは事實でせう。其といへば何でもお筆さんも、もう朝鮮も詰まらん満洲にでも行き度いなんか言つてゐましたつけ。」

「其なら三嘴さんに連れて行つて貰へばよかつたに。」

「大方三嘴さんの方で御免蒙つたのでせう。」とお京は笑つた。

二十三

其處へ這入つて來たのは洪さんであつた。例の古びた洋服を

着て端然と坐つて挨拶をした。

「石橋さんをお訪ねしましたが、今朝早くお出掛けになつたさうでございますから、一寸お伺ひ致しました。」と言つて、口許の皺を動かし乍ら白眼勝の眼で他の顔を凝視した。余は私に彼の夜の回想談を待設けてゐたが洪さんは其に就て何とも言はなかつた。唯余が、

「一昨夜は色々お世話になりました。大變面白うございました。」と挨拶したのに對し、

「どうも失禮致しました。」と簡単に答へたに過ぎなかつた。其上今朝はいつもより特に威儀を正してゐるやうで、素淡の家に在つた時のやうな打解けた風は微塵も見せやうとしなかつた。

「いかゞですお崩しになりませんか。」と余は其端然と正座して

ゐる洋服の膝を崩すことを勧めた。洪さんは、

「失禮致します。」と言つて其長い膝を組んだけれども、體はチャ
ンと眞直ぐに立て、兩手を正しく膝小僧の上に置いてゐた。其
からふとした事から話は朝鮮貴族を初め所謂兩班どもの家庭の
事になつた。洪さんは口を極めて其の墮落を痛罵し、

「今朝も或人が来て華族に對する種々の憤慨談をしますから私
は斯う言つて遣りました。華族になつたことは幸福に似て決し
て幸福とはいへない。彼等の子弟に一人として頼みになるもの
があらうか。彼等が家産を蕩盡して路頭に迷ふやうになるのも
遠からん事である。憐れ其は爵位を貰ひ金錢を貰つたが爲めて
ある。と斯う言つて遣りました。其男も其て少しは意を和らげ
たやうでございました。」と言つた。

「華族に對する憤慨談といふのはどういふのですか。」

「矢張り阿諛追従の徒が爵位を得たといふ不平でございます。」

と言つて自分の顔にも抑へ難き悲憤の色を閃かせたが、すぐ巧み
に其を微笑の皺の中に包んでしまつた。此間或る人は洪さんに
就て余に斯ういふ話をした。其人が或日朝鮮華族某氏の家に行
つたところが丁度洪さんが来てゐて三人の間でいろく雑談を
した末、主人は洪さんに向つて、

「お前も今のやうな境遇では氣の毒だ。まあ少し辛抱しなさい。

其うち郡守位には周旋して遣る。」といふやうな意味の事をいふ
と洪さんは頻りに叩頭して感謝の意を表してゐた。けれどもも
とく其新華族某氏と洪さんとは人物の間に大變な段階がある。
洪さんは一時排日黨であつたり併合に反對したりした爲めに今

てこそ貧乏して失意の地位に居るけれども、相當に學問もあるし、随分凄腕をも持つて居る男で、雄辯家としては朝鮮人中第一に推しても耻しくは無い。其に反して主人に至つては學問も無し、たいした見識もなし、唯オツチヨコチヨイで旨く某々等の手先に使はれたが爲めに爵位を贏ち得たのである。其オツチヨコチヨイの主人などにあんな事を言はれて其て感謝の意を表さねばならぬ、洪さんも考へて見れば可哀想なものである。と斯んなことを言つた。余は其話を思ひ出して、其悲憤の色を襲んだ微笑の皺を殊に氣の毒に思つた。洪さんは更に言葉を和けて、

「だから私は言つて遣りました。華族がどうか斯うだとかから見た上の事で日本の當路者からいへば併合の衝に當つた彼

等の勳功を認めるのに何の不思議がありません。要するに其は朝鮮に於ては大問題では無い、大問題は千三百万の百姓が此の新

政によりて皇澤に潤ふや否やにあると。」

「そこで結論はどうなるのですか。」
「申す迄もありません。以前は郡守が苛斂誅求を遣り、其上に又觀察使が遣りました。其處で朝鮮の百姓家に倉といふものはありません。若し倉といふやうなものがあつて其處に一俵でも貯があつたなら其は直ちに郡守に没收されました。さういふ悪政の後に此新政が敷かれたのでありますから百姓はどんなに喜んでおますか、其は喩へやうがございませぬ。」と言つて人の顔色を伺つた。

「其て百姓の子弟といふやうなものに學問をするものがありま

すか。

「ありますとも。朝鮮の人間は役人になるといふ事が何よりの名譽でございまして又無上の尊敬を世の中から受けるのでございしますが以前はチャンと階級が極つてゐて兩班で無ければ役人にはなれん事となつてゐました。其制度が壞れたのでございましてすから百姓の子弟の希望は一番に役人になつて見度いので親兄弟も亦其を希望して其爲めに家産を傾けて迄も學問をしやうといふものが多くなりました。」

「日本の維新後と同じ事ですな。」と余は自分の幼い時を思ひ出した。士族は却て商業や農業を志して慣れぬ事に失敗し商賈人や百姓は自分の子弟を官吏にして無上の光榮とした。今の朝鮮は丁度日本のあの時代に發端するのであらう。西洋で百年で遣

つた事を日本では十年か二十年で遣つたやうに朝鮮では又其を三年か五年に遣つて終うのかも知れぬ。」

「官吏以外のものになる爲めに學問するものはありませんです

か。」

「今のところ有りましても餘程少數でございませう。」

「若し日本の社會と同じ徑路を辿るとすれば其うち實業に志す爲めに學問するものも出来るやうになりませう。」

「さうでございませう。」と洪さんは答へたが其は頗る冷かな答



であつた。洪さんにしてからが政治以外には格別の趣味を持たないらしかつた。洪さんは又斯んな話をした。

「私ももと平安道のものでございますが元來平安道の人間は氣が勝つてゐまして、現に此間から出た刺客の類も皆平壤附近のものでございます。其處の青年が此頃よく訪ねて参りまして、多少過激な議論など致しますものがございしますが私は斯う言つて教へて遣るのでございます。今の滿洲を見るがよい。此頃滿洲に排日熱が盛んだが私にあれば支那が滿洲を失ふ前徴ではあるまいかと危んで居る。斯の如く排日思想を鼓吹せなければならぬやうになつたのは既に日本の勢力の底深く浸み込んでしまつた證據である。さうして排日の暴動などを遣れば遣る程却て滿洲の運命を縮めるのである。其證據は遠きに求めるに及ばぬ、足許

の朝鮮を見るがよい。朝鮮の滅亡を早からしめたものは排日思想と無稽の妄動とであつた。お前等が國家の滅亡を残念に思ふのは尤もであるが天下の大勢はどうすることも出来ぬ。お前等は最早空論に目を消す時では無い。此上は唯國家有用の材となる事を心掛けねばならぬ。さうして一番の急務は日本語を研究せねばならぬ。お前等は一年でも一年半でも日本語を遣つて其れから官立の學校に這入り資格を取るやうにするがよいと斯ういふ風に教へて遣るのでございます。

余は洪さんの熱のある慷慨談を聞くことかと待設けてゐたら決論は唯日本語獎勵といふ意外な點に到着したことを物足らなく思つた。けれども余も日本人の一人である以上洪さんが或注意を拂つて力めて無事な決論に達したことも無理からんこと、

いはねばならなかつた。

「其て結果はどうなりますか。貴方のいふ事を聞く者の方が多うございますか。」

「十人のうち五人迄はいふ事を聞きまして、現に其結果として日語學校に這入つたものがもう澤山ございます。」

「日本語の普及といふ事は日韓人双方に取り便宜なことでございますな。」

「さうでございますとも。それで此頃は世間一般に其事に氣が附いたらしく各種の夜學校なども盛に稽古をしてゐるやうでございます。」

「失禮ですが、貴方の御子息はもうお幾つ位におなりですか。」

「十七になりまして大阪府の中學校に入れて居ります。泉州界

に知つた人があるものでございますから其處の中學校に通はせて居ります。」

「其他のお子さんはい？」

「其他はブツと小さうございまして、五つの女の子と三つの男の子がでございます。十二年間日本に放浪して一度も歸らなかつたものですから、總領との間が大變離れて居ります。」と言つて洪さんは淋しく笑つた。

二十四

「石橋さんがお歸りになりました。二三人もお客様がありますが、お構ひなければいらして下さい。」と小娘の女中が洪さんに傳

達して来た。洪さんは了承して剛三の部屋に行つた。

昨日禁止された演説會といふのはどんな性質のものであつたのか知らぬが、其以來何となく風雲の急なものがあつた。剛三を中心とした浪人組の往來が頻繁なやうであつた。余は小娘に聞いて見た。

「お京さんはどうしたい。」

「石橋さんのお部屋にゐます。」

「石橋の部屋には多勢のお客がゐるらしいね。」

「え。」

「大分昨日から騒いでるぢやないか。」

「え、昨日の朝の間はお筆さんが踊つたりなんかして陽氣でしたわね。あれから晝後になつて、三四人お客様が入らして、御一



緒にお出掛けになつて、夜遅くお歸りになり、今朝早く又お客様があつて御一緒に御出掛けになり、今お客と一緒にお歸りになつたのです。お京さんが終始お座敷に行つてますから、詳しい事は判らぬけれど、何だか少し容子が變よ。とませた口を聞いて首をかしげた。

「お前の名を此間一度聞いたけれど忘れてしまつた。何でも珍らしい名だつたねえ。」

「私の名？ え、本當に變な名ですわ。とやです。」

「どう／＼おとやさんか。おも

しろい名ね。お前は世話しいのが好きだ、閑なのが一番いやだとか言つてゐるさうだね。感心な女だ。誰かい、旦那様を周旋して遣り度いものだ。」

「あらいやだ。」と言つておとやさんは顔を赤らめて袖で口を隠した。

「おとやさん、あの表を通る物賣りは何といふのだい。」「海鼠サリヨ」といふやうに聞こえるが、今頃海鼠があるわけも無し。」

「海鼠ぢやありません。玉子ですよ。」

「サリヨ」といふのは。」

「どういふわけですか、朝鮮人は皆しまひにサリヨをくつゝけます。日本の物賣りが入りませんか」といふやうなわけでは無いのでせうか。」

「成程。」と言つて聞いてゐると又外の物賣りが来る。

「根深サリヨ。」おかみさん根深の上等負けとくから買ふておくれなさい。」と南山樓の裏口から呼んでゐる。是等の物賣りは今迄もよく来たのであるが、今日程染々と聞いたことはなかつた。

「あれ等は皆朝鮮人かい。」

「え、あれは二人共朝鮮人ですが中には支那人も来ます。支那人のは尻が下らずにだんく尻上りになりますからすぐ判ります。あゝ、あれがさうですわ、あの遠方に聲の聞こえてゐるのが。」

あれが毎日来る支那人です。」

暫く待つてゐると其聲はだんく近づいて来た。

「大根、胡蘿蔔、茄子。大根、胡蘿蔔、茄子。大根、胡蘿蔔、茄子……」

其は極めて無器用に而も精一杯に濁つた聲を張り上げて殆ど

休みなしに呼ぶので朝鮮人の助詞や關係詞迄を省略せずに極めて悠長に呼んで歩くのとは全く趣を異にしてゐた。

支那人と朝鮮人とはどちらが正直かね。ハイ、下をさし。

「どちらですか。」とおとやさんは氣乗りのせぬ返辭をしたが急に思ひ出したやうに、

「朝鮮人の方は、それは見えすいたやうな狡猾事をしますよ。去年の秋でした。一人の朝鮮人が柿を賣りに來ましてねえ、片方の籠のは八錢に片方は五錢といふのを八錢の方を五錢に負ければ買つてやらうといふと、逆でも黙自だと言つて歸り掛けて置き乍ら向ふの路次に這入ると、其五錢の方のを八錢の方の上に移して、負けた。」と言つて歸つて來るのです。けれども罪は無いわ、こちらが知つて居た事が判ると、ニタ／＼笑ひ乍ら歸つて行く

んですもの。其にまた斯んなこともありましたわ。矢張一人の朝鮮人が柿を賣りに來たのを宅の若い衆が戯談に其籠の中のを一つか二つ取つて逃げたところが朝鮮人は籠を其處に置いた儘一生懸命に其若い衆のあとを追はへて行つたのです。其留守に籠の中の柿をどうかされるといふ事は氣が附ないんですもの。まるで子供見たやうですわ。支那人になるとそんな事は無いてせう。」と實例を上げておとやさんは明快な答を與へた。

二人で何を申よく話してゐらつしやるの。」とお京が顔を出して、

「あなたもあちらで一緒に御飯を上つてはどう。石橋さんがさう仰しやるんですよ。どうなさいます。こちらでおとやさんの